

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

ロシア語系エストニア人とは誰か

—「第二世代」の実践とアイデンティティの可塑性—

2018 年 1 月

氏 名：寺町六花

学籍番号：201310384

指導教員：関根久雄教授

目次

第1章 序論.....	3
1. 研究の目的.....	3
2. 先行研究.....	5
(1)アイデンティティに関する理論.....	5
(2)ロシア語系住民のアイデンティティ研究.....	8
3. 研究方法.....	11
第2章 エストニア共和国とロシア語系住民.....	13
1. エストニア共和国の概要.....	13
(1)エストニア共和国の歴史.....	13
(2)国内におけるロシア語系住民—首都タリン市とイタ・ヴィル県.....	14
2. ロシア語系住民の「統合」政策.....	16
(1)ロシア語系住民のパスポート問題.....	16
(2)国家語としてのエストニア語.....	20
(3)「統合」プログラムの策定.....	20
(4)「統合」の停滞.....	20
第3章 インタビュー.....	21
1. 調査方法.....	23
2. 9名の語り.....	25
(1)パスポートの選択.....	25
1)外国人パスポート保持者.....	26
2)帰化によるエストニアパスポート取得者.....	27

3)自動付与によるエストニアパスポート保持者	28
(2)エストニア語習得と社会との関わり	32
(3)「統合」に対する評価.....	50
(4)小括.....	62
第4章 分析.....	65
1. アイデンティティの可塑性―「非・明示」のアイデンティティ.....	65
2. 可塑性が脅かされる時―集団性の出現	68
3. 公的な「統合」への疑問符.....	70
第5章 結論.....	73
注.....	77
参考文献	80
Summary.....	83
謝辞.....	85

図目次

図 1	バルト海とその周辺地図.....	1
図 2	エストニア地図.....	1
図 3	旧ソ連西部の地図.....	2
図 4	エストニアパスポートの表紙と外国人パスポートの表紙.....	18

表目次

表 1	エストニアで用いられる各パスポートの特徴.....	19
表 2	インタビュー協力者の経歴の概要.....	24



図1 バルト海とその周辺地図

(出典：小森 2009:9)



図2 エストニア地図

(出典：小森 2009:8)



図3 旧ソ連西部の地図

(出典：Craft Map⁽¹⁾の白地図を基に筆者作成)

第1章 序論

1. 研究の目的

故郷から離散し、ホスト社会に対するアイデンティティの境界を維持しながら、実体あるいは想像上の故郷との接触を図るディアスポラたち [ブルーベーカー 2009:382-386] は、人々が国民＝国家の枠組みを越えて移動する現代において世界中に存在している。

1991年のソヴィエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連）の解体は、各共和国の独立を祝う基幹民族以外の住民にとっては故郷喪失の経験であり、ソヴィエト人ディアスポラの誕生を意味した。ソ連時代に民族間の交流語であったロシア語の地位は、各共和国において国家語である基幹民族語が定着することによって低下し [小田桐 2011:65]、ロシア語母語話者たちは、各共和国において言語的なマイノリティ集団に属することになった。ロシア語母語話者たちと各共和国の基幹民族の間で生じる摩擦、そしてソ連の継承国とも言えるロシアとの接触を維持しようとするロシア語母語話者たちの存在は、新たな国家建設に取り組む各共和国において、大きな課題の一つになったのである。ソ連から 1991 年に独立を果たしたエストニア共和国においても、エストニア語が公用語として定められ国民＝国家の建設が始まると、こうしたロシア語系住民(Russian speakers)の処遇が最重要問題の一つになった [小森 2005:113]。

エストニアでは 1940 年のソ連による侵攻後、エストニア系住民の集団追放や国外退去、またソ連の各地域からの移民の入植により、民族構成が大きく変化した。1934 年にはエストニア系住民が全人口の 90%近くを占めていたが、1989 年には 40%近くがロシア語系住民になっていた [河合 2005:629-630]。ソ連時代にはエストニア語を母語とするエストニア系住民もロシア語の必修授業を受けた他、各地からの移住者も共通語としてロシア語を話すなど、ロシア語は覇権的な力を有する公用語のような存在であった。

しかし独立後にエストニア語が唯一の公用語として定められると、エストニア語の習得、エストニア国籍を得るための言語試験などが多くのロシア語系住民に課されることになった。特に独立直後の 1990 年代には一部のロシア語系住民とエストニア系住民の間で緊張が高まり、以後ロシア語系住民の「社会統合」はエストニアにおいて

大きなテーマとなった。EU 加盟の条件として必須であった「少数民族の保護」要件を満たし、ロシア語系住民への対応について隣国ロシアから批判されることを避けるためにも、エストニア政府は「統合プログラム」の策定に乗り出した。政府は 2000 年に「統合プログラム 2000-2007」を策定し、エストニア語教育の充実とエストニア市民権取得の拡大、民族的マイノリティの文化的権利の保護を明記した。その後も「統合プログラム」の策定は続けられており、最新のもので 2020 年までの計画が公表されている。

一方でソ連解体から四半世紀あまりが過ぎ、海外への渡航が原則として禁止されていたソ連時代と比べ、人や物の移動は格段に活発化した。エストニアは 2004 年に EU と NATO に加盟し、2005 年には OECD の仲間入りを果たすなど、新自由主義国家として急速な発展を遂げている。こうした中で、2011 年の国勢調査では、エストニアの人口の約 70%が唯一の公用語であるエストニア語を母語とし、30%がロシア語を母語としている⁽²⁾。ロシア語が覇権語であったソ連時代を知り、その後に故郷喪失を経験した「第一世代」のロシア語系住民と比べ、独立後のエストニアで育ち国家語教育を受けた「第二世代」をめぐる環境は、大きく異なるものであると言える。もはやエストニアにおける「ソヴィエト人ディアスポラ」とは、必ずしもエストニア社会との境界を維持し、実体あるいは想像上の故郷—ロシアやソ連—との接触を図る人々だとは言い切れない。

そこで本稿では、エストニアにおけるロシア語系住民「第二世代」によるアイデンティティの構築を明らかにする。ロシア語系住民の帰属意識すなわちアイデンティティは、「統合」を測る指標の一つになっており、エストニア政府や研究者の間でも関心が高い。だが論考の中には、彼らのアイデンティティを「エストニア人」と「ロシア人」の対立軸の中に置こうとするもの [Küün 2008; Soll et al 2015] や、「ロシア人」や「ウクライナ人」など、ある特定のエスニックグループの代表として彼らを分類しようとする傾向が見受けられる [Integration Monitoring of the Estonian Society 2017; Aidarov et al 2013]。しかしこのように統一された自己を前提とするカテゴライズは、「アイデンティティが決して単数ではなく、さまざま、しばしば交差し、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される」[ホール 2001:12] という現状と矛盾する。

一方でカテゴリ化は、世界を構造化し、秩序づける行為であり、カテゴリが無けれ

ば世界は混沌としてしまう [ブルーベーカー2016:246]。重要なことは、「カテゴリとは本質的に不完全なものだと仮定」し、「そのカテゴリを、さまざまな意味が競合する永遠に使用可能な場として機能させる」[バトラー1999:42-43] という出発点に立つことである。筆者が本稿のタイトルにつけた「ロシア語系エストニア人」という表象もまた、エストニアに住むロシア語母語話者たちを一方的に規定するカテゴリの一つである。しかし筆者はロシア語系住民「第二世代」による個人の語りに注目することによって、このカテゴリの内部の複雑さを示したいと思う。

本稿ではエストニアにおけるロシア語系住民の「第二世代」による語りを基に、国籍選択、エストニア語の習得、エストニア社会やロシアや EU 諸国など諸外国との関わりにおける個人の実践に注目する。カテゴリの本質的な不完全さから出発し、彼らのアイデンティティが、具体的な出来事の中でどのように変化していくのかというプロセスを分析することにより、「エストニア人」あるいは「ロシア人」というカテゴリの中には収まりきれない個々のアイデンティティの可塑性を示したい。

さらに本稿では、アイデンティティの可塑性が、具体的にどのような場面において担保され、どのような場面で危機にさらされるのかについても考察を加える。多くの人々が、アイデンティティの統合を欠いても逸脱的な存在になることなく社会生活を送ることができる [上野 2005:35] にも関わらず、アイデンティティの統合を要求される事態、すなわち特定のひとつのカテゴリに自らを規定しなければならない事態とは、どのようなものだろうか。

個々のアイデンティティの可塑性と、可塑性が脅かされる事態、その双方を検討することによって、エストニアにおけるロシア語系住民「第二世代」のアイデンティティ構築を明らかにしていきたい。

2. 先行研究

この項ではまず始めに、アイデンティティに関する理論の流れを追う。次にロシア語系住民のアイデンティティについての先行研究を検討し、先に見たアイデンティティ研究の流れを踏まえ、うえて疑問点を明らかにする。

(1)アイデンティティに関する理論

上野は『脱アイデンティティ』の中で、アイデンティティ概念の生みの親であるエ

リクソンが想定したような、統合をめざす安定的なアイデンティティが、いまや過去のものになったことを指摘する [上野 2005:32]。上野は心理学的で本質主義的な自我論が、社会学的研究によって、いかにして操作的で構築的な概念に変わってきたかという学説史を振り返った後、ポスト構造主義の理論家、バトラーによる「エイジェンシー (agency)」概念に注目する。エイジェンシー概念によれば、言説行為の前に「主体」はなく、言説行為を通じて「主体」は事後的に構築され、アイデンティティはこの言説行為の反復という過程を通じて事後的に構築された沈殿物 (sedimentation) である。このようなアイデンティティの概念は、「言説実践の場で生産・再生産される過程的、流動的、折衝的なもの」であり、もはや同一性や一貫性とは相容れないものであるという [上野 2005:27,29]。バトラーと同様にエイジェンシー概念を用いるホールもまた、アイデンティティとは「決して単数ではなく、さまざまで、しばしば交差していて、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成され (中略)、たえず変化・変形のプロセスのなかにある」 [ホール 2001:12] ものであると主張する。

このようにアイデンティティが可塑性を持つのであるならば、ある集団を分類しようとするカテゴリとは、本質的に不安定なものである。バトラーは『ジェンダー・トラブル』の中で、「女というカテゴリをとおして理解される何らかのアイデンティティがあり、それが言説面でのフェミニズムの利害や目標を提起しているだけでなく、政治的な表象／代表 (representation) を求めるときの主体を構築している」 [バトラー 1999:19] と考えるのが従来のフェミニズムの理論であるとした。しかし実際には、「何が女というカテゴリを構築しているのか、あるいは構築すべきかについて同意をみていない」 [バトラー 1999:20] 現実がある。バトラーが指摘するのは、「政治的、言語的な『表象』領域が、主体を形成するさいの基準をまえもって設定してしまい、その結果、主体として認知可能なものだけが表象されることになってしまう」危険性である [バトラー 1999:19-20]。重要なことは、分析のためにカテゴリを用いつつも、「カテゴリとは本質的に不完全なものだと仮定することによってのみ、そのカテゴリを、さまざまな意味が競合する永遠に使用可能な場として機能させることができる」 [バトラー 1999:42-43] という視点を持つことだろう。

このような議論を考慮に入れ、本稿のアイデンティティ研究はアイデンティティの「種類」や「強度」を分類することを目的とせず、むしろそうしたカテゴリの不安定さを前提とする。注目するのは、具体的な実践の中で個々のアイデンティティがどの

ように構築されていくかというプロセス、いわばアイデンティティの可塑性である。

しかし「個人によって異なる、多様で移り変わるアイデンティティ」を記述するだけでは、アイデンティティ構築の全体像について十分な分析を行うことはできない。そこで分析概念として用いるのが、国籍の種類や使用言語などの客観的な指標とは必ずしも一致せず、統合されていないアイデンティティの状態、いわば自らのアイデンティティを何か特定のカテゴリに当てはめることを躊躇する「非・明示」のアイデンティティである。

そもそも人は、日常の社会生活のなかで常にエスニシティやネーションへの帰属に縛られているわけではない。上野が指摘するように、「多くの人々は、アイデンティティの統合を欠いても逸脱的な存在になることなく社会生活を送り（中略）、断片化されたアイデンティティのあいだを、一貫性を欠いたまま横断して」[上野 2005:35] 暮らしている。つまり、アイデンティティが統合されていない「非・明示」のアイデンティティの状態があるからこそ、アイデンティティの柔軟性や可塑性が担保されていると言える。

日常生活の中で人々が「非・明示」のアイデンティティを保っていることは、人々の集団性を高めようとするエスニシティの政治が「失敗」していることを示している。一方でエスニシティは、ある「事件 (event)」として「集団性 (groupness)」を帯びることがある [Brubaker 2002:168]。Brubaker のこの指摘は、「非・明示」のアイデンティティの状態が脅かされる状態があり、人々が、彼ら／私たちという二項対立の集団的カテゴリの中に自らを投じざるをえない状態、またはその集団に巻き込まれていく事態が生じることがあると解釈することができる。

しかし岸が指摘するように、断片化した流動的で多様な自己を生きること、あるカテゴリにふたたび還っていくことも、アイデンティティが常に問われる状態、いわば果てしない自己への問いかけという「アイデンティティ」の状態に縛りつけられたマイノリティにとっては全く同じこと [岸 2013:403,419] であるのかもしれない。この指摘はアイデンティティ研究が、複雑化し多様化したアイデンティティに、カテゴリを解体する無意識の「抵抗」を観察者が先取りして見出すというロマン主義的なアプローチ [岸 2013:409] に陥ることを強く批判している。

岸の指摘を考慮すれば、個々のアイデンティティの「非・明示」的な構築と、そのアイデンティティの状態を脅かす集団性の出現という両方のプロセスに注目すること

は、マイノリティが常にアイデンティティの問いかけの状態にあるという意味では同じことかもしれない。しかしながら両方のプロセスを考察することは、マイノリティの「果てしない自己への問いかけ」が具体的にどのようなものであるか、その全体像を考察するうえでは意義のあることだと筆者は考える。なぜ「非・明示」のアイデンティティと「明示」された集団的アイデンティティの両方が存在するのか。両者が併存するのはどのようなときか。この両者の関係性をどのように説明できるのか。これらの疑問については、インタビューの分析を行う第4章で議論を展開したい。

(2)ロシア語系住民のアイデンティティ研究

この項では、エストニアのロシア語系住民のアイデンティティ研究において、どのような論考が行われているかを検討する。筆者が注目するのは、それぞれの研究においてどのような結果が出たかということよりも、むしろ「ロシア語系住民のアイデンティティはどのように分類されてきたか」ということである。その分類のされ方が、果たしてアイデンティティの可塑性を考慮に入れたものか、固定的なカテゴリを前提とはしていないかという点に、筆者は関心を持って検討を行う。

Küün は、エストニアにおいて人口に占めるロシア語系住民の割合が高い地域に住む、ロシア語学校を卒業したロシア語系住民第二世代の若者たちにインタビューを行い、ロシア語のみを使用するモノリンガルの家庭の出身者よりも、エストニア語とロシア語の両方を使用するバイリンガルの家庭出身の方が、エストニア人たちとの共通性を感じているという結果を導く。そのうえで彼女は「非エストニア人 (non-Estonians)」の若者たちの間で、「エストニア人」と「ロシア人」というアイデンティティの他に、エストニア語とエストニア文化の知識を持ち、より忠誠的なエストニア市民の感覚を持つ新しい「エストニア＝ロシア人 (Estonian Russian)」のアイデンティティが、特にバイリンガルの家庭出身者に見受けられるとする [Küün 2008:201]。しかしこの論考では、「エストニア人」や「ロシア人」というカテゴリが不変で統一されたものとして扱われ、そこに当てはまらないとされる「エストニア＝ロシア人」の内部の多様性や可塑性に注意は向けられていない。

Soll らは、ロシア語母語話者の生徒たちの自己表象の分析において、民族＝文化的な実践 (ethno-cultural practice) と、感情＝認識的な自信 (emotional cognitive confidence) に注目し、生徒たちの民族＝文化的な帰属 (affiliation) を表そうとする。「あなたは誰

に同一しますか (who do you identify with?)」という質問に対する生徒たちの反応を基に、Soll らは生徒たちの「アイデンティティに対する自信の強度」を測り、「ロシアに強く集中した、自信を持ったアイデンティティ」、エストニア人に対してもロシア人に対しても否定的感情を持つ「不安定なエストニア＝ロシア人のアイデンティティ」、社会におけるエストニア人の優位性の存在について懐疑的な「代替的アイデンティティ」の3種類に分類する [Soll et al, 2015:230]。

Soll らの研究では、生徒たちのアイデンティティは「エストニア人」と「ロシア人」という二項対立の中に置かれており、アイデンティティの自信の「強度」が議論されている。しかしそれでは、仮にアイデンティティに「強度」があるとして、その「強度」は一人の個人の中で、常に不変で安定したものなのだろうかという疑問が残る。Soll らが言う「自信のあるアイデンティティ」の持ち主には、アイデンティティの揺らぎは全く生じないことなのだろうか。

一方で、エストニアにおけるロシア語系住民が、ウクライナ系やベラルーシ系など非ロシア系の住民を含むことに注目し、「エストニア人」と「ロシア人」という二項対立を乗り越えようとする論考もある。Aidarov らは、1991 年から続くエストニア政府による民族的マイノリティの政策について、ロシア語話者である非ロシア系のマイノリティをロシア文化や言語的拡張りと同一化する、「ロシア化(Russification)」だと批判する [Aidarov et al, 2013:105]。加えて Aidarov らは「さらなる均質化と、エストニアのロシア系コミュニティの脅威の高まりを防ぐため、民族的マイノリティをできるだけ断片的で小さな存在に留めておく必要がある」[Aidarov et al, 2013:104] と主張し、民族的マイノリティがウクライナ語をはじめとする彼ら独自の言語や、習慣を学ぶ機会を保障する重要性を指摘する。

ロシア語母語話者があたかもロシア系住民のみを意味するような事態に疑問を呈した点で、Aidarov らの論考は注目すべきだろう。しかしながら「ウクライナ人」「ベラルーシ人」などの新たに細分化されたラベルを人々に張り付けることもまた、マイノリティを何らかのエスニックグループの代表に位置付け直したいという欲求に基づくものである。また、「エストニアのロシア系コミュニティの脅威の高まりを防ぐために民族的マイノリティを断片的な存在に留めておく」[Aidarov et al, 2013:104] という主張は、非ロシア系のマイノリティが政治的に利用されることを容認しているようにも読み取れる。

エストニアへの帰属意識の強さを国旗や国家に対する愛着と結びつけ、エスニックグループの代表かエストニア国家の代表であるかという限定された選択肢を示す方法をとる調査もある。2017年6月にエストニアの文化省が発表した「エストニア社会の統合モニター2017」の報告書⁽³⁾では、ロシア語系住民のアイデンティティの実態調査において以下のような方法がとられている。それは、「私はエストニアの国旗がはためているのを見て誇りに思う。エストニア国家は私の権利を保護し、公共の利益を提供している」という意見に賛同するかどうか、そして「あなたがあなたのエスニックグループの代表であるか、エストニア国家の代表であると考えたとき、どちらのグループにあなたは属していると感じるか？」という問いかけに対する答えによって、彼らの国家アイデンティティ（State identity）の強度を調査するというものであった。

一方、ロシア語系住民第二世代のアイデンティティ的統合（identificational integration）について研究する Nimmerfeldt は、アイデンティティのカテゴライズについて批判する。彼によれば、移民やその子孫のアイデンティティが多成分で多面的な概念として取り上げられてきているにも関わらず、実際の多数の先行研究が多くの場合においてカテゴリ的なアイデンティティの測定のレベルに留まってしまっている。たとえば、事前に調査者によって決められたアイデンティティのカテゴリの選択肢を回答者に与えて自己カテゴリ化（self-categorization）させる調査は不適切だという [Nimmerfeldt 2009:26,28]。

それでは、事前に用意されたカテゴリを選ばせるのではなく、または事後的に当事者の意識を何らかの固定的なカテゴリに押し込めるのでもない、アイデンティティ構築の分析にはどのようなものがあるだろうか。

Zabrodszkaja は、個人は自身をカテゴライズするためにエスニシティを選んだり、新たな集合的アイデンティティのカテゴリを構築できたりするとして、エスニシティとは社会的なカテゴリであるという出発点から議論を進め、ロシア語話者のアイデンティティの交渉の様子の全体像を描き出す。彼女によれば、マイノリティの中で、文化的ルーツを保持しながらも、優れた公用語の知識があり、良い教育と幅広い就職機会に恵まれ、言語的にエストニア社会と同化しやすいサブグループは、成功への道としてメインストリームのアイデンティティを発展させる。一方で、公用語の知識の不足により高等教育を受ける機会がなく、就職機会も限られるサブグループは、マジョリティに対する不調和のみを描く、失敗した深まる分断の環の中にいる。彼らはこの現

状への反抗として、「偉大なロシア」や「ソヴィエトへのノスタルジー」といった、帝國的アイデンティティを維持しているという [Zabrodskaia 2015:237]。

Kus らは、ソ連時代には高い社会的地位を有していたロシア語系住民らが、1991 年のエストニア独立後に突如として「不法移民」や「植民者」になったことから、彼らにアイデンティティの危機が訪れたことを指摘する。彼女らの調査によれば、実際にロシア語系住民たちの口から語られたのは、彼らの社会的地位がエストニア人よりも低く、少数派の立場にあり、「二流市民」として自らを捉えていることであったという [Kus et al, 2013:429]。このように社会的地位の低下を肯定的に受け止められないロシア語系住民たちは、第二次世界大戦の勝利というソ連のナラティブを復活させることによって、肯定的なアイデンティティを創出することもあるという [Kus et al, 2013:424]。

固定的なカテゴリの中にアイデンティティを分類するのではなく、当事者の語りによってアイデンティティの交渉の様子を描いた点において、Zabrodskaia と Kus らの手法は意義があるといえる。これらの調査では、エストニア社会と調和したアイデンティティを発展させるロシア語系住民がいる一方で、エストニア社会との間で生まれる不調和に反発して、帝國的アイデンティティを育てるロシア語系住民がいることが示されている。しかしながら、両者の研究で示されるのはアイデンティティ交渉の全体像であり、それぞれの回答者が具体的にどのような経験を通じ、それぞれのアイデンティティを形成するに至ったかというプロセスについては言及されていない。

3. 研究方法

第2章ではエストニアにおけるロシア語系住民の歴史、彼らが集住する地域の概要、ロシア語系住民を取り巻く諸制度について、先行研究や筆者が現地を訪れた際のフィールドノートを用いて概観する。第3章では、独立後のエストニアで育ち、学校でエストニア語教育を受けた「第二世代」のロシア語系住民9名に対し、筆者が行った対面式のインタビューを用い、国籍選択やエストニア語の習得、エストニア社会やロシア、EU など諸外国との接触において、彼らがどのような選択を積み重ねてきたのかを明らかにし、「統合」に対して各自が持つイメージを記述する。続く第4章では、第3章で行ったインタビュー結果を基に、本章で取り上げた「非・明示」のアイデンティティという分析概念を用い、どのような状況で「非・明示」のアイデンティティが発

揮されるのか、あるいは「明示」しなければならないのかを分析する。第5章では、ここまでの分析で得られたロシア語系住民「第二世代」によるアイデンティティ構築の全体像を整理して結論を述べたのち、本研究の課題点を挙げる。

第2章 エストニア共和国とロシア語系住民

1. エストニア共和国の概要

(1) エストニア共和国の歴史

エストニア共和国はバルト三国の最も北に位置する国であり、ロシア、ラトヴィアと国境を接している。面積は 4.5 万 km² で、日本の 9 分の 1 ほどの広さにすぎない。バルト海を挟んで北にはフィンランドがあり、高速フェリーで 2 時間ほどの距離である。人口は 2017 年 1 月現在で 131 万 5,635 人⁽⁴⁾ であり、EU 加盟後の若者の人口流出や少子高齢化により減少傾向にある。

エストニアは数百年の間、常に大国の支配下にあった。デンマーク、ドイツ騎士団、スウェーデンの支配を受けたのち、1721 年の北方戦争を機にロシア帝国の支配下に入った。独立宣言を行ったのは、1917 年のロシア革命と、ボリシェヴィキの権力掌握に続く内戦でロシア国内が混乱していたさなかの 1918 年であった [カセカンブ 2014:161]。

しかしこの独立期間は長くは続かなかった。1940 年にソ連軍の侵攻を受けたのち、首都タリンにソ連の傀儡政権が誕生、1941 年から 1945 年までナチスドイツの支配下に置かれたが、1945 年、ドイツの敗戦によりエストニアは再びソ連の構成国となった。この過程で大きく変化したのが、国内の民族構成である。1918 年から 1940 年までの独立期間には、エストニア系住民が全人口の約 90% であり、エストニアは「民族的に均質な国」であった [Sokolova 2011:28]。だが 1941 年と 1949 年の二度の大規模な強制連行により、3 万人以上のエストニア人がシベリアへ送られ、1944 年には 8 万人近くが難民としてエストニアを去った。また第二次世界大戦後、50 万人以上の東スラブ系移民が入植し、唯一合法としての共産党、連邦中央の社会主義的経済政策及びロシア語優先の言語・教育政策を通じてソヴィエト化が進んだ。大戦間期の 1934 年に行われた国勢調査ではエストニア系住民が全人口の 90% 近くを占めていたが、1989 年には人口の 40% 近くがロシア語系住民になっていたのである [河合 2005:629-630]。

ソ連からのエストニア分離独立の動きが芽生えたのは、1985 年にソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフが翌年に始めた、ペレストロイカ（建て直し）とグラスノスチ（公開）⁽⁵⁾ が本格化してからである。「歌の革命」と呼ばれる独立運動ではエストニ

ア語の歌が数万人のエストニア人によって歌われ、当時禁止されていた青、黒、白のエストニアの国旗が掲げられた。そして 1991 年 8 月 20 日にエストニアは独立を宣言した。同年 12 月 25 日にソ連が崩壊、ロシア軍は 1994 年にエストニアから完全撤退した。以後エストニアは急速に西欧化の道を歩み、2004 年には NATO と EU に加盟、2005 年には通貨ユーロを導入し、OECD の一員にもなっている。エストニアは情報・通信技術で高い技術力を持ち、2003 年にはデンマークとスウェーデンの起業家、そしてエストニア人のエンジニアたちによって、インターネット電話サービス「スカイプ」が首都タリンで設立された⁽⁶⁾。2007 年には国政選挙において世界初の電子投票を実施している [カセカンブ 2014:298-299]。

(2)国内におけるロシア語系住民—首都タリン市とイタ・ヴィル県

2011 年の国勢調査によれば、エストニアでは 157 の言語がネイティブ・ランゲージとして使われている。唯一の公用語であるエストニア語の母語話者は人口の約 70% であり、ロシア語の母語話者は約 30% を占めるが、ロシア語は公用語として認められていない。

ロシア語母語話者たちには、ソ連時代にロシア、ウクライナ、ベラルーシなどの各地域から労働目的で移住してきた者の他、ロシア正教の古儀式派⁽⁷⁾ やロシアとの国境沿いの地域出身者など、エストニアに古くから住む者もいる。Zabrodszkaja によれば、ソ連時代、ソ連内でロシア語は異民族間の共通語であったために、ロシア語話者は一般的に現地の言葉を学ばなかった。したがって、彼らの共通のアイデンティティは主にロシア語を用いて構築されたために、これらの集団はその民族的に異なる背景を区別することなしに、ロシア語系住民と呼ばれている [Zabrodszkaja 2015:224]。

現在、ロシア語系住民が多く住むのは、エストニア北西部にある首都タリン市と、北東部にある、ロシアとの国境に近いイタ・ヴィル県である。2011 年の統計では、タリン市の人口の 50.1% がエストニア語母語話者、46.7% がロシア語母語話者であり⁽⁸⁾、市の半数がロシア語母語話者であった。またイタ・ヴィル県については、2000 年の国勢調査によると、人口 17 万 9,702 人のうち約 14 万人がロシア語母語話者、3 万 2,000 人がエストニア語の母語話者であり⁽⁹⁾ ロシア語母語話者が多数派を占めていた。

筆者のインタビューに応じた 9 名のうち、8 名がタリン市出身、1 名がイタ・ヴィル県の出身である。ここではタリン市と、その中でもロシア語系住民が多く住むタリ

ン市ラスナマエ地区の様子について、筆者が 2017 年 2 月と 6 月に現地を訪れた記録を基に記したい。

タリン市は、バルト海に面する港町である。石畳の道、白壁に赤色の屋根が特徴の旧市街の街並みはユネスコの世界遺産に登録されており、多くの観光客で賑わう。宿泊施設や飲食店にはエストニア語の他、英語、ロシア語、フィンランド語の案内が充実している。中心部の書店で売られている書籍の約 80%がエストニア語で書かれたものであるが、ロシア語や英語の書籍も見られ、店員の名札には多言語が話せることを示すバッジがつけられている。しかしバスやトラムなどの公共交通機関を利用すると、エストニア語以外の案内は一切流れない。旧市街から少し離れると、建物の看板や標識の全てがエストニア語であり、英語やロシア語の表記は見当たらない。

中世のヨーロッパのような旧市街の街並みを後にし、市の中心部からバスで東に 10 分ほど進むと、街の概観は一変する。6 車線の通りの両脇に、灰色のコンクリートでできた 9 階建ての集合住宅が立ち並ぶ。これが 1976 年から 1990 年までソ連の主導で開発された地区・ラスナマエの入り口である。主にソ連各地からの移住者向けの住居を確保するために生まれたこの地区は、1990 年代までロシア語系住民の集住地区であった。

ラスナマエ地区にある国際空港とそのすぐ近く的大型ショッピングモール、海外から参入するロジスティクス企業のオフィス、現代的なデザインの新たなアパートや郊外型の大型スーパーは、社会主義国の面影を一切感じさせない。一方で地区の中心部にある市場では、食材の量り売りが行われ、付近の路地では花や衣類を売る年配のインフォーマルセクターの姿も散見される。市場の従業員や利用者たちはほぼ全員がロシア語を話しているようだが、品物につける値札の表記には必ずエストニア語が記載され、ロシア語は見当たらなかった。

1990 年代始め、経済が不安定であった頃のラスナマエ地区は麻薬取引などの犯罪の温床と見なされ、「ロシア人ゲッター」というステレオタイプが存在していた。合唱による独立運動「歌の革命」の際には、ラスナマエ地区はソヴィエトによる抑圧を象徴する象徴となり、「ストップ・ラスナマエ」⁽¹⁰⁾ という歌がうたわれるほどであった[Saar 2015:87]。

しかし同地区は現在、ロシア語系住民だけが住むわけではない。2012 年現在、ラスナマエの約 11 万 2,000 人の人口のうち、約 65%がロシア語系住民である[Saar 2015:86]

が、近年はタリン中心部の家賃高騰により、エストニア系住民も多く住み、ラスナマエはベッドタウンの性格が強くなってきている。さらに、教師、警察官、消防士らとその家族といった、低所得者向けの公営住宅がラスナマエ地区に建設されていることも、エストニア系住民が増加している理由の一つである。

筆者が 2017 年 6 月にラスナマエ地区を広く散策した際には、同地区の景観が場所によって大きく異なっていると感じた。新しいアパートやマンションが建設されている側にある静かで清潔な公園で、子犬を散歩させる人や真新しい遊具で遊ぶ親子連れの姿もあれば、あるエリアでは子供の靴や服、ゴミが道に落ち、10 数名ほどのティーンエージャーたちが集まってキックボードやローラースケートの技の練習をしていた。傍らの集合住宅や建物の壁にはスプレーで”This is underground”といった落書きや、ロシア語で говно（英語の shit にあたる）や смерть（死）という落書きも見られた。

一方、エストニアでロシア語系住民が多く暮らすもう一つの地域が、ロシアとの国境に近いエストニア北東部のイタ・ヴィル県である。筆者は 2017 年 2 月、イタ・ヴィル県の北東端、ロシアとの国境沿いに位置するナルヴァ市を訪れた。ナルヴァとロシアの都市イヴァンノヴゴロドの間には川が流れており、その上に掛けられた橋には入国審査を待つロシアからの車が並ぶ。国境検問所は徒歩でも越えることが可能であり、小さなキャリーケースを引いてナルヴァから橋の方へ向かっていく人々の姿もあった。検問所がある付近の川幅はわずか 200 m ほどで、ロシア側とエストニア側の両岸で釣りをしている人々もいた。ナルヴァ城のかつての要塞の他には、目立った観光資源はなく、タリンで見たような観光客の姿は見当たらない。エストニアで最も優秀な大学とされるタルト大学の分校は、最近建設されたガラス張りの近代的なデザインの校舎だが、ナルヴァ中心部で真新しい建物はその分校と大型スーパーのみのようである。その他はソ連時代に建てられた 5 階建ての集合住宅や大型スーパー、古着屋や魚屋などの個人商店が並んでいる。圧倒的多数がロシア語話者であるここナルヴァでも、標識や店の看板はエストニア語で書かれ、ロシア語はわずかしは見当たらなかった。

2. ロシア語系住民の「統合」政策

(1) ロシア語系住民のパスポート問題

ソ連時代、ソ連の構成国の住民たちはソ連のパスポートを所有していたが、各共和国の独立後は、各国のパスポートが新たに発行されることになった。独立後、ソ連を

構成していた各共和国では、独立時に同国に居住していた者全てに市民権を与える「ゼロ・オプション」が採択された。しかし一方で、エストニア、ラトヴィアでは「1940年のソ連による支配開始以前の国民及びその子孫が国民」とであると定められ、それに該当しない者は全て国籍申請を要求された。この背景には、1940年6月のソ連による占領以前の状態の「原状」回復が前提であり、半世紀にわたるソ連時代は「法的には」存在しなかったという解釈があった。「原状」回復の志向は、連邦政府に対する自らの分離独立運動を支える上で理論的武器の役割を果たし、独立後のエストニア共和国の法体系にも大きく影響するものであった〔河原 2005:631-634〕。

独立当時エストニア国内にいた約 50 万人のロシア語系住民のうち、約 8 万人が大戦間期のエストニア市民およびその子孫であり、自動的なパスポート付与の対象となった。しかし残りの約 42 万人は法的には非市民であり、帰化申請の手続きが必要であった。1992 年 2 月に定められた国籍法では、非市民の帰化条件として、(1)申請以前の最低 2 年間の居住および申請後さらに 1 年間の審査のための定住義務、(2)エストニア語の試験、(3)国家への忠誠のための宣誓、(4)エストニア憲法の理解についての試験に合格することが定められた。しかし KGB など外国の諜報機関やソ連軍に勤務した者は帰化申請を認められず、また国籍取得要件にあった「合法的な収入」は、市場経済への移行期に失業状態にあった多くのロシア語系住民にとって不利になった〔小森 2009:136〕。したがって、これらの住民のほとんどが 1992 年 6 月の憲法制定のための国民投票、9 月の大統領および議会選挙から締め出されたのである〔河原 2005:638〕。

1993 年 6 月に議会を通過した「外国人法」は、1940 年 6 月以降にエストニアに移住してきた者を「外国人」として定義し、彼らに対し同法採択の 1 年以内に公的な居住申請を行うことを要求、外国人パスポートの携行と 5 年ごとの居住許可更新を義務付ける内容であった⁽¹¹⁾〔河原 2005:639〕。エストニアを祖国とみなす多くのロシア語系住民を「外国人」と見なしたこの法律の制定直後には、ロシア語系住民の国外退去促進という目的があったという〔小森 2009:140〕。

しかし国籍法や外国人法は、隣国ロシアによる批判や、CSCE（欧州安全保障協力機構）や CE（欧州評議会）といった欧州の国際機関がエストニア政府に緩和を求めたこと〔河原 2005:640〕によって、その後、出生地主義へと軟化していく。特に 1995 年に EU 加盟を申請していたエストニアにとって、欧州の国際機関からの要求は無視できなかった。1997 年の外国人法改正では、1995 年 7 月までに居住登録をしたロシア語系

住民に永住資格が認められ、1998 年の国籍法改正では、親がエストニアに 5 年以上居住する無国籍者の場合、1992 年 2 月 26 日以降にエストニアで生まれた 15 歳以下の子供は親権者の届け出により国籍が付与されることになった〔小森 2009:141〕。

さて、次に注目したいのは、現在エストニアで用いられているパスポートの種類である。2011 年の国勢調査によれば、全人口の 85%がエストニアパスポートを、8.1%がロシア、ウクライナ、ラトヴィアなど他国のパスポートを、6.5%が外国人パスポートの保有している⁽¹²⁾。外国人パスポート保持者とは、すなわち無国籍者である。



図 4 エストニアパスポートの表紙（左）と外国人パスポートの表紙（右）

（出典：エストニア国境警備局 HP より⁽¹³⁾）

図 4 の左側の赤いパスポートがエストニアパスポート、右側の灰色のパスポートが外国人パスポートである。後者の内部には、エストニア語と英語で、「このパスポートの保持者はエストニアの市民ではない」「このパスポートの保持者はパスポートの有効期間の間、エストニアに戻ることができる」と記載されている。

表 1 では、それぞれのパスポートの保持者が持つ権利と義務について、兵役義務、参政権、公務員就職と大統領就任の可否、EU との関わり、ロシアへの渡航という観点から整理した。「エストニアパスポート」の項目が二つあるのは、同パスポートが自動付与で給付される場合と、帰化申請によって取得する場合があるためである。

表 1 を見てみると、独立後に自動付与の対象となったエストニアパスポート保持者と、帰化申請によるエストニアパスポート保持者が有する権利と義務はほとんど同一

であるが、微妙な違いがある。帰化申請によるエストニアパスポート保持者は、大統領に就任する権利が認められていない。また、外国人パスポートの保持者は国政選挙への参政権はないが、兵役義務⁽¹⁴⁾はなく、シェンゲン協定を利用すればEUの協定加盟国を自由に行き来でき、ロシアにもビザなしで行けることから、ある意味最も身軽な存在ともいえる。他国籍者、特にロシア国籍をはじめとする「定住外国人」は、外国人パスポート保持者と同様の権利を持つが、もしロシア国籍者であれば、シェンゲン協定に加盟しているEUの国であっても、渡航の際にビザが必要となる。

表1 エストニアで用いられる各パスポートの特徴

パスポートの種類	兵役義務	参政権	公務員就職	大統領就任	EUとの関わり	ロシア渡航
エストニアパスポート (自動付与)	○	○	○	○	EU市民	要ビザ
エストニアパスポート (帰化で取得)	○	○	○	×	EU市民	要ビザ
外国人パスポート (無国籍者)	×	地方選挙で投票可	×	×	非EU市民。EUで就労不可。 シェンゲン協定加盟国への移動は自由	ビザ不要
他国のパスポート (ロシア国籍の場合)	×	地方選挙で投票可	×	×	非EU市民。EU渡航には要ビザ	ビザ不要

(第3章のインタビュー協力者からの聞き取りに基づく。なお、外国人パスポートの保持者と他国パスポートの保持者に認められている地方参政権は、エストニア定住者に限る。)

(2)国家語としてのエストニア語

エストニア語はフィン＝ウゴル語族に属する言語であり、フィンランド語に近く、インド＝ヨーロッパ語族に属するロシア語とは全く異なる言語である。ソ連時代、各共和国では基幹民族語とロシア語の二言語併用状況があったが、ロシア語話者には現地語能力は要求されず、現地語話者にのみロシア語の習得が義務付けられていた [小森 2009:116]。独立後、唯一の公用語としてエストニア語が定められると、言語法の施行によりロシア語の案内や標識・看板が一斉に消え [小森 2005:125]、町の景色の中でエストニア語以外の言語が過度にある場合は、言語監督局によって罰されるようになった。

ソ連時代の教育システムでは、教授言語がエストニア語かロシア語であるかによって学校が分かれていたが、独立後にはエストニア語の学習が全ての生徒に義務付けられた。エストニア語を教授言語とする基礎学校（1年生から9年生）への子供の入学を希望する家庭が増加し、ロシア語で授業を行う基礎学校の児童の割合は減少傾向にある [小森 2005:123]。また、次項で詳述する 2000 年に策定された統合プログラムでは、カナダ・モデルを参考にした言語集中訓練プログラム（immersion program）が導入され、エストニア語のみを用いる授業を受けたのち、徐々にロシア語や多言語の割合を増やしていくタイプのプログラムを実施する学校が人気になった。また 2007 年秋からは、エストニアの全ての学校の中等教育（10 年生から 12 年生）において、授業の 60%をエストニア語で行うことを義務付ける法律が定められた。

(3)「統合」プログラムの策定

ソ連時代の移住者の「母国」への帰還は、政府の予想に反して限定的なものであった。このため、エストニア政府、そしてエストニアと同様にロシア語系住民を抱えるラトヴィア政府は、ロシア語系住民の統合プログラムの策定に積極的に乗り出した [カセカンプ 2014:302]。こうしてエストニアにおいて、国家プログラム「エストニア社会における統合 2000-2007」が 2000 年 3 月に採択された。プログラム採択の背景にあったのは、EU 加盟の条件として、国内のマイノリティの権利の保護が要請されたことや、ロシア語系住民に対する政府の扱いについて、ロシア政府から批判を受けたためである。

第一次統合プログラムではエストニア語教育とエストニア国籍者の拡大に重きを

置くとともに、民族的マイノリティは自らの母語と文化を学び、民族的差異を維持する権利があると掲げられた⁽¹⁵⁾。これに続く第二次統合プログラム「統合戦略 2008-2013」は、1989 年の時点と比較して大幅に国家語能力のレベルが上昇したことを評価する内容であったが、成人のエストニア語能力の向上、エストニア語とロシア語の共通情報空間の拡大、十分な能力を有する教師の確保が課題として挙げられた[小森 2009:129]。

政府はさらに「エストニアの統合 2020」を 2014 年に発表、2014 年から 2020 年までの統合計画を策定し、「異なる言語や文化的背景を持つ人々が活発にエストニア社会に参加し、民主主義的価値観を共有すること」が基本目標として設定された⁽¹⁶⁾。

(4)「統合」の停滞

一方で、ロシア語系住民の「統合」を大きく後退させる出来事が 2007 年 4 月に発生した。タリン市中心部にあったソ連兵の銅像、通称「銅の兵士」像⁽¹⁷⁾の移設を政府が行ったことに対し、2007 年 4 月 26 日と 27 日の夜にロシア語系住民たちによる暴動が起こったのである。結果として 100 人以上が負傷、ロシア語系の男性 1 名が何者かに殺害され、900 人近くが尋問のために留置・拘留された。この暴動はエストニア独立後に起きた最大規模のものであり、参加者の多数はロシア語系住民であったが、エストニア系住民の参加者もいた。

暴動発生以前から、「銅の兵士」像はエストニア系住民とロシア語系住民の対立の火種であった。兵士像は多くのエストニア系住民にとっては占領の象徴であったが、ロシア語系住民にとっては戦争で犠牲になったソ連兵を追悼する大切なものであった[カセカンプ 2014:302]。ソ連の戦勝記念日である毎年 5 月 9 日には、退役ロシア軍人たちを中心に、兵士像を囲んで記念日を祝う集会が開催されていた[小森 2009:220-222]。兵士像はロシア語系住民にとって、ソ連崩壊後の社会的混乱と大国の地位喪失の中で、戦勝記念という唯一のポジティブな集合的記憶を想起させる存在であった。しかし 2006 年 5 月 9 日、エストニア人民族主義者がエストニア国旗を兵士像の脇に掲げたところ、記念日に集まっていたロシア語系住民がそれを引き裂き、対立が生じた。2007 年 3 月に総選挙を控えていたエストニア人の改革党党首・アンシプは、兵士像移設を公約に掲げるなどして多くの票を集め、大統領に就任した。そして 2007 年 4 月 26 日の深夜、兵士像の移設は天幕に隠された中で実行された。移設実施についてロシア語系住民を含めた住民に情報公開を行うといった、それ以前になされたあらゆる

約束が政府によって反故にされたことに、ロシア語系住民たちは強い憤りを感じたのである。ロシア語系住民の割合が高い北東部のイタ・ヴィル県でも同様に、一部の人々が抗議運動を展開した。事件後には、ロシアからエストニア国家機関に対するサイバー攻撃や、在モスクワ・エストニア大使館への若者集団からの攻撃が続き、ロシア及びロシア語系住民に対する反感がエストニアで高まった〔小森 2009:222〕

兵士像の移設事件以後、エストニアで暴動は起きていない。だが 2014 年夏に起きたロシアによるクリミア干渉に際し、ロシアメディアのプロパガンダ性が高まったことをエストニア政府は危惧した。エストニア国内のロシア語話者たちは従来、国境をまたぐケーブル放送や衛星放送により、ロシアのテレビチャンネルを視聴しており、これによりエストニア語話者とロシア語話者の情報フィールドが大きく異なるものとなっていたためである〔Joesaar 2015:46-47〕。政府は 2015 年、国営放送 ERR に約 400 万ユーロの年間予算を出し、国営放送初のロシア語テレビチャンネル、ETV+の開設を決定した⁽¹⁸⁾。それまで ERR はロシア語のラジオ番組を手掛けてはいたが、テレビチャンネルは存在しなかった。しかしロシア語系住民の間では、エンターテインメント性の強いロシアのテレビチャンネルの人気の依然として高く、ETV+の視聴率は 2016 年 7 月時点で 0.7%と低い数値にとどまっている⁽¹⁹⁾。

第3章 インタビュー

1. 調査方法

筆者は2017年の2月、3月、6月にエストニアを訪れ、24歳から36歳までのロシア語母語話者たち9名（男性6名、女性3名）にインタビューを行った。彼らは独立後のエストニアで育ち教育を受けた「第二世代」のロシア語系住民であり、家族とはロシア語を用いて会話をしている。

インタビュー協力者と出会ったきっかけは、筆者が2016年9月から2017年6月まで、モスクワの大学に交換留学をしていたことに関係する。2016年11月に筆者はモスクワで、インタビュー協力者であるニーナ、オレグ、マリらと偶然知り合った。彼らはエストニア文化庁の後援を受け、在モスクワ・エストニア大使館の招待で「エストニアの現代ロシア文化フェスティバル」を開催した。彼らはこのフェスティバルを、タリンとイタ・ヴィル県のナルヴァですでに2回開催済みであり、このモスクワでのフェスティバルは初めてのロシアでの開催であった。5日間にわたったフェスティバルでは、エストニアの現代アートの展覧会やロシア語文学のレクチャー、エストニアのバンドの演奏などが行われ、筆者は観客の一人としてそこに参加していた。一般参加者の人数は5日間の各イベントで10名から20名と小規模なものであったが、彼らがタリンで行った初めてのフェスティバルでは、100名ほどの観客が集まっていたという。

ニーナは夫のオレグと共にエストニアでロシア語の無料カルチャー雑誌を発行しており、エストニアのロシア語文学や音楽に詳しく、フェスティバル全体の主催者であった。またオレグはミュージシャンであり、フェスティバルのイベントの一環として、モスクワのパブでバンド演奏に加わっていた。またアーティストであるマリは、エストニアの現代アートの展覧会の企画を担当し、モスクワ中心部にあるギャラリーで展覧会を開催、フェスティバル中にロシア語系住民のアーティストたちと共に作品を解説するトークイベントも行った。

筆者がフェスティバルに参加した動機は、2014年にエストニアを個人旅行して同国に興味を抱いていたことであり、参加時点では論文調査の一環であるという認識を強く持っていなかった。筆者は会場でニーナたちと知り合い自己紹介をしてから、後日、

研究における問題関心を定め、メールで改めてインタビュー協力を依頼し、彼らからさらなる協力者を紹介してもらった。また協力者の一人のユーリとは、モスクワの同じ大学寮で知り合い、協力を依頼した。

インタビューの所要時間は1時間半から3時間ほどで、筆者との対面で行った。さらに一部のインフォーマントには、2017年12月にスカイプで追加取材を行った。

インタビューの使用言語は英語である。なお、インフォーマントの間では、ロシア語母語話者たちをエストニア語母語話者たちと区別する方法として、**Russian-speaking people** や **Russian-speakers** という単語の他に、**Russian** という単語が用いられることがあった。これが民族的なロシア人を意味するのか、ロシア語系住民を意味するのかは定かではなく、文脈による。したがって **Russian** という表現を用いていた場合は、和訳の後にその旨を捕捉する。

表2は、パスポートの種類や学校や大学、職場での使用言語などの観点から示した、インタビュー協力者9名の経歴の概要である。名前は全て仮名である。**Rus** はロシア語、**Est** はエストニア語、**Eng** は英語を指す。またパスポート（国籍）については、エストニアパスポート（エストニア国籍）は **Est**、外国人パスポート（無国籍）は **Non-citizen** と示している。**Immersion program**（言語集中訓練プログラム）の内容は第2章2節2項にある通りである。

表2 インタビュー協力者の経歴の概要

名前・取材時の年齢	性別	学校の教授言語	大学の教授言語	パスポート (国籍)	職業	仕事の使用言語
ニーナ(36) ※オレグとは夫婦	女	Rus 音楽学校では Est	Est	Est	大学事務員／ 夫とロシア語 無料雑誌発行	Est のみ 翻訳の仕事 もする
オレグ(31) ※ニーナとは夫婦	男	Rus	Rus	Non-citizen	ミュージシャン／妻と無料 雑誌編集	Rus のみ 翻訳の仕事 もする

マリ(32)	女	Rus	Est	Est	芸術家／広告 企業勤務	Est 基本。た まに Rus
ヴィクトル (30)	男	Rus	Rus	Non- citizen ⇒Est	国営放送局 ディレクター	Rus 基本。 Est も使う
レフ(29)	男	Rus	Est	Est	技師／かつて 環境教育の NGO 活動	職場は Rus。 仕事先では Eng, Est、仏 語など
イヴァン(35)	男	Rus	Est	Est	芸術家／外資 系の広告・IT 企業勤務	Eng 基本。 Rus, Est も 使う
ニコライ(34)	男	Rus	— (大学 行かず)	Non- citizen	写真家	Rus のみ
ユーリ(24)	男	Est (immersion program)	Est (1 年 ロシアに 留学)	Est	大学院生	Est のみ
アンナ(27)	女	Est	Est	Est	シンクタンク 勤務	Est 基本。た まに Rus

(筆者の調査に基づく)

2. 9名の語り

本項では、(1)パスポートの選択、(2)エストニア語の習得と社会との関わり、(3)「統合」に対する評価に焦点を当て、9名の語りを引用する。

(1)パスポートの選択

本項では外国人パスポート保持者、帰化申請によるエストニアパスポート取得者、自動付与によるエストニアパスポート保持者の経験と、その家族の経歴を取り上げる。

1)外国人パスポート保持者

オレグ

オレグの父は、ウクライナとルーマニアの間に位置するモルダヴィア共和国の出身、母はエストニアとの国境に程近いロシア西部の町、プスコフの出身である。父はウクライナの港町オデッサの海洋学校に進学し、母はロシアのレニングラード（現在のサンクトペテルブルク、以下ペテルブルク）で図書館学を学んだ。二人は政府の指示ではなく、1980年代に労働目的でタリンに自ら移り住み、タリンで知り合った。父は水兵として働き、母はラスナマエの郵便局に勤め、エストニア語を使う機会はなかった。オレグの母はエストニア語を少し勉強したこともあったが続かなかったという。

ソ連崩壊後、父はロシアのパスポート、母は外国人パスポートを選び、当時5歳ほどであったオレグは外国人パスポートの保持者になった。モルダヴィア出身の父がなぜロシアパスポートを選択し、ロシア出身の母がなぜ外国人パスポートを選択したのか、その理由はオレグにはわからないという。オレグは帰化試験を受けているが、結局外国人パスポートを保持したままであることを決意した（以下カッコ内筆者補足）。

オレグ：学校を卒業したとき、言語試験、憲法の知識についての試験など、帰化のための全ての試験をパスしました。でもそのとき、エストニアの市民権を取るのには少し待った方が良いと思って、いまだに取っていません（苦笑い）。（外国人パスポートなら）ロシアにビザなしで行けるし、EUにも旅行できます。だからいいんです。

ミュージシャンであるオレグは、自らのバンドの演奏やライブ鑑賞のため、ペテルブルクを年に2回ほど訪れている。オレグの妻であるニーナも、無国籍であればロシアやEUにビザなしで行ける利便性や、兵役が免除されるメリットを指摘する。彼女自身もオレグとペテルブルクを訪れるが、エストニアパスポート保持者であるため、一回のロシアへのビザ申請で60ユーロを支払わなければいけないことが負担だと話す。彼らの5歳の息子はエストニアパスポートを持っている。

ニコライ

ニコライの両親はタリン生まれである。母方の祖父はロシアのプスコフ出身、祖母

はリトアニアとベラルーシの国境近くの村の出身で、1950 年代中頃にタリンに来了。父方の家族について詳しいことは記憶していないという。水兵であった父はほとんど家におらず、母は専業主婦をしていた。

ニコライは年に 2 回から 10 回ほどペテルブルクの友人たちを訪れる。外国人パスポートではロシアにビザなしで行ける利点があること、本来禁止されている EU での就労にも抜け道があることを彼は指摘する（以下カッコ内筆者補足）。

ニコライ：「自分は市民権がないから、もし取りたいのなら試験をパスしなきゃいけないんです。試験も受けてパスしたけれど、パスポートを得るには税金が必要でした。若かったから、『もういい、（パスポートなんて）取らない！』って(笑)。今は試験をもう一度受けないといけないけれど、でもできません。」

筆者：「税金を払わなければいけないんですか？」

ニコライ：「でもそんなに高くない、50 ユーロくらい。」

筆者：「灰色パスポート（外国人パスポート）を持っているんですね。」

ニコライ：「そう、でも例えばペテルブルクにビザなしで行けるんです。友達もたくさんいるし。エストニア以外の EU で働くことはできません。でもわからない、自分はいろいろなところに住んだことがあるんだけど、スペインのグラナダでは、英語でなんて言うのか、Permission? すごく小さな町だったんだけど、スペイン語ができる友達と就労許可を得るために警察署に行ったらもらえました。彼らは灰色のパスポートとエストニアパスポートの違いをわかっていなかったからチェックしていなかった。「彼はエストニア人のようだ、OK」って。本当はスペインで自分は合法的には働けないけど、あるやり方では可能なんです。」

2) 帰化によるエストニアパスポート取得者

ヴィクトル

ヴィクトルは 20 歳まで外国人パスポート保持者であったが、帰化申請によりエストニアパスポートを取得した。父はベラルーシ出身のユダヤ人、母はウクライナ出身である。父はペテルブルクで物理学を学んでエンジニアになった後、タリンからロシア

北部のムルマンスクで働くかの選択肢を政府から与えられ、前者を選んだ。当時バルト三国は、フィンランドに近いことから、ソ連の中で最も自由な雰囲気があったという。ヴィクトルの母方の祖父は、タリンの港を建設するために政府の指示で 1950 年にタリンに来た。母はタリンの学校でコンピュータを学んでエンジニアになった。しかしソ連崩壊後、彼らは失業し、父はテレビの配線工事の仕事を、母はロシア語系住民の多い工業地帯でカフェの従業員として働き始めた。父は毎日 2 時間ほどかけてエストニア語を覚えようとしていたのをヴィクトルは覚えているが、今でも両親はほとんど話すことができないという。

ソ連崩壊後に無国籍になった両親は、現在も外国人パスポート保持者である。ヴィクトルは 20 歳でエストニアパスポートを取得し、2 歳年下の弟は 28 歳になって取得した。ヴィクトルにとってロシアに行くことは「全く必要ない」ため、無国籍でいることの利便性を彼は感じていなかった。エストニアパスポートの取得は「試験をパスしたい意志を持つことだけが必要」であり、容易であったという。

一方で、2 歳年下の弟が 28 歳まで無国籍であった理由は、ロシアヘビザなしで行ける利便性によるものではなく、帰化申請をすること自体を不公平に感じていたためであった。弟がそれでもエストニアパスポートを取得したのは、欧米などの地域ヘビザなしで旅行するための利便性を重視したためであった（以下カッコ内筆者補足）。

ヴィクトル：「6 か月前くらいだったと思います。彼（弟）は私にこう言って、私も理解しました。『なぜ自分がエストニア市民であると証明すべきなんだ？もしここで生まれて間違っただけをしていないのなら、極めておかしい状況だ。もしその国で生まれたのなら、その国でパスポートを持つ権利があると言うべきだ』と。彼がエストニアの市民権を取得したのは、エストニアパスポートが与える可能性のためです。」

3) 自動付与によるエストニアパスポート保持者

ニーナ

両親はベラルーシ出身のエンジニアで、1980 年代初頭に政府の指示によってタリンに来た。両親はエストニア語をほとんど話せず、ニーナの父はエストニア語の個人レッスンを受けていたこともあったが、「エストニア語を話さなければならない」という

重圧を感じて結局上手く行かなかった。だが両親は 1990 年代初め、エストニアパスポート取得が比較的容易であったというある時期に同パスポートを取得することができたという。ニーナは当時 16 歳に達しておらず自動的に同パスポートを得たというが、一方で 4 歳年上の彼女の兄は 16 歳を越していたため自動付与の対象とならず、30 歳まで外国人パスポート保持者であった。

ニーナの兄はミュージシャンであり、オレグと同じバンドで演奏している。兄は 30 歳になったとき、ニーナに「エストニアパスポートを取るときが来た」と言って帰化申請によりエストニアパスポートを取得したが、普段はロシア語しか話さない。彼が学校で学んでいた 1990 年代初頭は、多くの人が高い給料を求め翻訳の仕事をした結果として、給料の安い言語教師が不足し、エストニア語の授業が 1 年間無いこともあったのがその理由の一つだという。

オレグによれば、28 歳を過ぎればエストニアパスポート保持者であっても兵役に行く義務がなくなるという。しかしニーナの兄がなぜ 30 歳になってエストニアパスポートを取得したのかについては、ニーナもオレグも理由はわからないという。

イヴァン

イヴァンは自身の家族の歴史について、「面白いけれど、ソ連時代の典型的なストーリー」だと笑う。イヴァンの母方の祖父母はロシア出身で、戦後まもなく政府の指示でタリンに働きにやってきた。祖父は水兵として、祖母は毛皮工場で働き、彼らはタリンで知り合って結婚した。一方、父方の祖父はエストニアとロシアの国境にあるペイプシ湖に浮かぶ島の出身であった。もともと島にはロシア正教の古儀式派の信者が多く、ロシア語が使用されていたため、祖父は全くエストニア語を話さなかった。だがエストニアの短い独立時代の間にその島はエストニア領であったため、祖父はエストニアパスポートの自動付与の対象になった。イヴァンがエストニアパスポートを持っているのはこのためである。イヴァンの父方の祖母はロシアのプスコフ出身であり、大学卒業後、政府の指示でロシア語教師として島に移り住み、エンジニアをしていたイヴァンの祖父と出会い、その後二人でタリンへ越した。現在この島はロシア領であり、国境地帯にあることから簡単に島を訪れることは許されていない。

イヴァンの両親はタリンで生まれ、母はタリンの学校を卒業した後、友達と一緒により良い教育を求めペテルブルクの大学へ進学した。両親はペテルブルクで出会いイ

ヴァンが生まれたため、彼のパスポートにある出生地はペテルブルクと書かれている。その後イヴァンたち家族はタリンにすぐ戻り、父は警察官を、母は新体操のコーチや国際試合の審判をしていた。ソ連崩壊後、父は警察官の職を失い、警備員や食料品店の店員として働き始めた。母はエストニア人の子供にも新体操のレッスンをすることがあるためエストニア語がかなり上手いというが、父は最低限しか話すことができないという。

マリ

マリはインタビュー協力者9名の中で唯一、ファーストネームも苗字もエストニア人の名前を持つ。父方の祖母の出身は、ジョージア（グルジア）にあったエストニア村で、現在その場所はロシア連邦のカラムイク共和国の一部になっている。マリによれば、ロシア帝国時代、各地の民族集団には帝国内の別々の場所で土地が与えられ、彼らはそこで労働し村を形成していた。シベリアにはエストニア村、ラトヴィア村、フィンランド村などがあり、ジョージアにもエストニア村、ドイツ系の村があったという。マリは父方の祖母の物語について、自らドキュメンタリー形式のショートビデオを制作している。それによれば、父方の祖母はエストニア村で生まれエストニア語を話していたが、幼少期に両親を亡くして孤児院に入れられた後、親戚の中で自分一人だけがロシア語しか話せなくなった。彼女はやがて結婚しタリンに移り、ロシア語の教師をした。エストニア語をもう一度学ぼうとしたが、話そうとするとなぜか恐怖心が湧き、今も話せないという。彼女が結婚した夫、つまりマリの祖父はエストニア人であり、17歳で赤軍に入隊して中国で日本軍と戦った。祖父の叔父はエストニア人の赤軍の上官で、ロシアでは英雄的扱いをされているかもしれないが、エストニアでは良く思われていないと思うとマリは言う。

祖父母はジョージアのエストニア村で出会い、1960年にタリンでマリの父が生まれた。エストニア人の祖父はロシア語も話せたため、家ではロシア語が使われ、マリの父は民族的にエストニア人であるが少ししかエストニア語が話せなかった。マリの母はウクライナ出身だが、ナショナリティは不特定であり、ソ連内の各地を転々としたためにロシア語が母語となった。その結果として、マリはエストニア人の名前と国籍を持ちながらも、ロシア語母語話者になった。

レフ

レフの母方の祖母はエストニア南部の出身であったが、第二次世界大戦のとき、ナチスドイツがタリンを占領した後にロシア南部へ避難した。彼女は後にペテルブルクでレフの祖父と出会い、祖父がロシアのムルマンスクで働くことになったので共に引っ越した。レフの母親は 1961 年にムルマンスクで生まれ学校に通った後、15 歳の頃タリンに引っ越して高校に通い、エンジニアになった。レフの父はポーランドとベラルーシのルーツを持ち、1955 年にロシアで生まれた。彼はベラルーシで勉強した後、タリンの海軍学校に進学して水兵になった。レフは母方の祖母がエストニア出身であるため、母方の全員とレフ本人はエストニアパスポート保持者であるが、父はエストニア永住権を持つロシア国籍者である。

レフの母は若い頃からタリンにいたためエストニア語が堪能であるが、父はほとんど話すことができないという。ソ連崩壊後、母親は小さな会社を運営し、父もそこで働いている。

ユーリ

ユーリの父は 1959 年、ロシアの都市で生まれた後、生後まもなくエストニア第二の都市、タルトに越してきた。父はタルトで医学を学んだ後、ソ連政府の指示で北東部のイタ・ヴィル県に移り住んだ。1961 年生まれ之母はロシアのウラル地方にあるエカテリンブルグで看護学を学んだ。ユーリの父の親戚がユーリの母と友人であったことから二人は知り合い、1980 年代に母はエストニアに移住した。

父はソ連崩壊後すぐ、エストニア語の試験を受けパスポートを取得した。医師である父はエストニア語が上手く、エストニア人の患者との会話にも問題ない。母は外国人パスポートの保持者であったが、1990 年代終わりにエストニアパスポートを取得した。彼女はエストニアに留まる決意をしていたので、ロシアパスポートを得る利点はなかった。外国人パスポートであればロシアへの行き来が自由であったため、病気をしていた母親を尋ねに頻繁にロシアに通い、母親が亡くなった後にエストニアパスポートを取得した。母は看護師として今も働いており、エストニア語はユーリの父より少し苦手である。イタ・ヴィル県に住んでいるためエストニア語を練習する機会はないが、母の仕事では必要であるため、週に数回エストニア語の授業やエストニア語のみで会話するクラブに参加し、最近は劇的に語学力が向上したという。

アンナ

アンナの親戚はエストニア南部のパルヌ、ウクライナのキエフ、モスクワとあちこちにおり、両親はともにエストニア人とロシア人のハーフである。アンナの二人の祖母はロシア南部コーカサス地方の同じエストニア村の出身であり、第二次世界大戦後にタリンに帰還した。アンナの父はタリン出身であるが、母はロシアで生まれ、キエフの大学に進学した後、タリンの家族の元に戻り、アンナの父と出会った。

アンナがパスポートの自動付与の対象になったのは、母がエストニアパスポートを持っていたためである。しかし父はタリン出身で彼の母親がエストニア人にも関わらず、外国人パスポートの保持者である（以下カッコ内筆者補足）。

アンナ：「（両親に）パスポートが与えられたときは、実はとてもパスポートを入手するのが簡単なときでした。単にエストニアが再び独立したことを受け入れて、何か誓いの言葉を言うだけでよかったんです。でもそのとき父はやる事があってエストニアのどこかに行っていて、入手できませんでした。ちょっと誤解のようなものがあって、彼の姉妹が父のためにパスポートを手に入れるはずだったんですが、上手くいなくて、だめになったんです。」

しかし外国人パスポートの保持者であることは、アンナの父親にとって何の問題もないという。父は政治に興味がなく、参政権のある地方選挙すら投票しないこともある。父はエストニア語を話すことができるが、エストニア国籍を取得する大きなモチベーションもないという。

(2)エストニア語習得と社会との関わり

本項では主に、エストニア語を習得していった過程に注目する。またその一方で、9名がエストニア社会やロシア、EUなどの諸外国とどのように関わってきたのかについても記述する。なお、エストニア社会とは「エストニア語の使用を中心とする社会」と定義し、9名が生まれ育ったロシア語を中心とするロシア語系住民社会とは区別する。ただし、本項では分析のために両者を区別するが、実際に双方の距離は完全に隔たっているものではなく、それぞれの母語話者がもう一方の言語を話すなど、混ざり合う部分も多くあるということを指摘しておきたい。

ニコライ

外国人パスポート保持者であるニコライは、1980年代の終わり、5歳の頃から両親と共にラスナマエに住み始めた。当時のラスナマエでは多くの建物が建設中で、ニコライは友人たちと空き地でサッカーをして遊んでいた。通っていた近所のロシア語学校は、およそ4,000人～5,000人の児童が通う、当時エストニアで最も児童数の多い学校であり、1クラスでは35人くらいの生徒が学んでいた。建物が足りず、校舎のすぐそばで新たな建物が建設中であったのをニコライは覚えている。

1990年代にラスナマエにエストニア人はほとんどおらず、いれば喧嘩が起きることもあった。ニコライにはエストニア人の友達はおらず、エストニア語を練習する機会にはなかったため、エストニア語を話せるようにはならなかった。また学校のエストニア人教師は「ロボットのように」、教育熱心ではなかったことにニコライは不満を持っていた。それでも、卒業後に受けた帰化申請のための言語試験はパスし、点数は良かったという。しかし彼は前述のように、結局外国人パスポートを保持したまま現在に至っている。現在エストニア語を使うことはないため、全て忘れてしまったという。

1年生から9年生まで学校に通った後、ニコライはコンピュータのプログラミングを学ぶためタリン市北部の学校に通ったが、向いていないことがわかり2年で退学した。そこから芸術創作に興味を持った彼は、自分自身で作品を作り始めた。十分な作品の実績を携えてエストニア芸術大学を受験したが、面接試験でエストニア語が話せなかったため入学は許可されず、ニコライは落胆した。

独学で試行錯誤しながら創作活動を続け、写真家として世界中を旅した後、現在ニコライはラスナマエの自宅アパート兼スタジオで写真制作を続けている。力を入れているのは、ラスナマエの景色や親しいロシア語系コミュニティを被写体にした、ラスナマエの私的なアーカイブ作りである。2017年5月には、タリンの旧市街の中心にあるギャラリーで個展を開催し、ラスナマエの景色の白黒写真を数十枚ほど展示した。

ニコライは、英語、ロシア語、エストニア語で用意された展覧会の案内の中に、「子供だった1990年代始め、ラスナマエは外部から自分を守ってくれる居心地の良い場所だった」と記している。ロシア語話者たちの「ゲッター」であったというラスナマエで、ニコライは安心感をおぼえていた（以下カッコ内筆者補足）。

ニコライ：「どう表現したらいいかわからない、いつものことではないし、全ての人の

ことではないけれど、(ラスナマエの外では) 拒まれているような感じでした。感受性が強かったから、とても苦しかった。ここで生まれたけれど、自分のことを愛していない母親と生きているような、そんな感じです。とても奇妙でした。もしエストニア人と出会って、私が彼のエストニア語を理解できないことがわかったら、彼は怒りました。子供だったからそのことは自分に影響を与えたし、自分の内部で大きくなっていったんです。」

ニコライは定職に就いておらず、自らを「全く社会化されていない人物」「アンダーグラウンド出身」と冗談交じりに話す。彼は写真の仕事を心から気に入っているが、収入を得るのは難しいため、一日の食事を買えないこともある。アーティストの友人たちの中には、金銭的な苦しさからドラッグ中毒になり、命を落としてしまった者もいる。

現在もニコライにエストニア人の友達はいない。だがガールフレンドはエストニア人であり、お互いの母語は話せないため英語で会話していると笑って話す。アーティストである彼女とは、合同で展覧会を開催する予定もあるという。彼はエストニア語教育に力を入れてきた政府に対し、「政府のしたことがどんなに無意味だったかってことだ、二人の地元の人間が英語で話しているんだから」と皮肉を言う。

ラスナマエの外では拒まれているような気がしていた彼だが、世界中を撮影のために旅して暮らした後、結果として今はタリンが最も心地良いと感じている。「タリンから出られないのならそれは拷問」だと言うが、「ただ旅ができればそれでいい」のであり、他の場所へ移り住みたいとは思っていない。彼の学校時代の多くの友達は、エストニアは小さすぎると言い、より多くの機会を求めてペテルブルクに限らずあらゆる場所へ旅立ったというが、ニコライはタリンに留まった。

ニコライ：「皆がキャリアのためにどこかに行くけれど、自分はここで働きたいし、ここが好きだし、この場所をより良くしたいんです。」

ニコライはいつかラスナマエに住む 10 代のロシア語話者の子供のために、出入りが自由な写真実験スタジオを作りたいと考えている。彼が子供のときにそのような機会はなかったことが理由だという。

オレグ

オレグはラスナマエ東部の幼稚園に通った。1990年代のラスナマエは犯罪が多く、不良たちで溢れていたため、外を一人で歩くのは危険であった。そのため幼い頃は自宅で遊ぶか、祖母が住むロシアのプスコフの村に遊びに行き、水泳、薪集め、キノコやベリー狩りなどをして過ごしていた。ラスナマエの近所の子供たちと遊ぶようになったのは学校に入ってからのものであった。オレグが通ったのは、ラスナマエの家の隣にあった学校で、1クラスの人数は30人～35人、1学年は4～5クラスがあった。エストニア語の授業は1年生から始まりロシア語母語話者の教師が指導にあたったが、10年生から12年生の間だけはエストニア人教師が授業を担当し、週に最低3～4時間の授業を受けた。

高校卒業時のエストニア語の成績は100点満点中93点であったが、流暢に話せる感覚はなかった。学校で習っていたのはアカデミックな表現が多く、実際に使われているような表現は身につかなかったためである。高校卒業後、オレグは帰化申請のための言語試験をパスしたが、先述のようにエストニア国籍を取得しなかった。オレグはタリン大学のスラブ言語文化学部に進み、ジャーナリズムを主にロシア語で学んだ。統計や哲学などいくつかの授業はエストニア語で受けたが、主な教授言語はロシア語であった。結果として周りにはエストニア人の友達はおらず、ロシア語話者だけが友人であった。それでもオレグは、「ここがホームランドで、母国で、生まれたところで、友達もいる」ため、「エストニアを離れることは一度も考えなかった」という。

父は水兵で、海外渡航が禁止されていたソ連時代に例外的に海外に行くことができたため、ジーンズ、風船ガム、ビデオテープレコーダーでも、欲しいものは何でも手に入った。1990年代は安価でCDを手に入れることのできる非合法の店に通ったが、ソ連崩壊後にはコマーシャルラジオが始まり、様々なジャンルの音楽を聴いた。いつもイギリスのポストパンクを聴いていたオレグは、14歳からは友達とバンドを組んで英語の歌を作った。だがロシアの音楽については「ロシアの伝統はくだらないポップミュージックを作ること」だと批判する。オレグとニーナは、ロシアの音楽や映画のレベルが低いのはビジネス目的であるためだと考えており、インディーズが一般的なエストニアの音楽の方がレベルは高いと感じている（以下カッコ内筆者補足）。

ニーナ：「ロシアのひどいポップミュージック！（筆者に向かって）聞いたことある？」

ロシアのポップミュージックはエストニアに比べてとてもレベルが低い。」

筆者：「残念ながら、同意します...どうしてなのでしょう？」

オレグ：「(ここからロシア語) それは慣用句がある。любит наш народ всякое говно (私たちの国民はあらゆる shit が好き) ...つまり、чем хуже, тем лучше (悪くなればなるほど良い)。」

だがロシアにも優れたインディーズのミュージシャンはいるといい、オレグとニーナはペテルブルクに年に二度ほど行き、ライブを鑑賞したり、自ら音楽演奏したりしている。オレグとニーナが季刊で発行している若者を対象としたロシア語の無料雑誌では、エストニアにおけるロシア語系住民のサブカルチャーを主に扱い、ペテルブルクのライブの様子をレポートすることもあれば、エストニア語の雑誌の記事を翻訳して転載することもある。2010 年から続くこの雑誌では、イラストレーターとしてマリとイヴァンが参加し、写真家のニコライや、アンナの NGO の活動がインタビュー記事に登場した。

オレグとニーナは共にラスナマエ出身であるが、現在は都心部の近くに住んでいる。ラスナマエは「遠すぎる」といい、文化的施設がないことも要因だという。二人が発行する無料雑誌も、都心部には置いているが、ロシア語系住民が多いラスナマエでは配布していない。「文化的なことに関心がある人は、いずれ都心部に来るから」というのが理由であるという (以下カッコ内筆者補足)。

オレグ：「これを読むエストニアのロシア語系住民たちが、自分のアイデンティティというものについて、よりよく感じるための助けになると思います。年上の世代の人々はもう、ソ連が崩壊してからどこにも故郷がないと感じています。私も少しだけ同じように感じています。なぜなら私はソ連で生まれて、私が育った 1990 年代は、混乱期 (смутное время) だったからです。今、状況は良くなっていると思います。若い人はもっと受容し合っています。」

一方、彼はロシアのテレビチャンネルを視聴し、インターネットでロシアのニュースを読む高齢のロシア語系住民について、以下のように言及する (以下カッコ内筆者補足)。

オレグ：「彼らはいまだに自分のことを、ソ連出身のロシア人（Russian）だと思っているんです。でも私たちの世代はそうじゃない。ロシアを訪れたいと思うし、繋がりがあるとは思っています。でも私たちは特殊で、自分のやり方（свой подход）があります。」

ニーナ

ニーナはラスナマエと都心部の中間地点にあるカデリオルグ地区の幼稚園に通った後、ラスナマエの家の隣にあったロシア語学校に通い始めた。子供の頃に一人だけいたエストニア人の友達に、ロシア語を話すことができた。現在でも、「エストニア人であってもロシア語を話せる人はたくさんいるから、相手がロシア語を話せると分かったら、ロシア語を話す」とニーナは言う。

最初に通った学校は9年生までの学校であったため、成績の良かったニーナは6年生のとき、エストニアで最も優秀なロシア語学校、ラスナマエ・ギムナジアに転校した。ニーナは幼稚園からエストニア語を少し学んでいたが、本格的な勉強を始めたのは3年生の頃である。エストニア語の授業の教師はエストニア人のネイティブスピーカーで、週に少なくとも3～4時間の授業があった。またニーナは通常のロシア語学校とは別に、音楽学校に並行して通っていた。音楽学校の授業は全てエストニア語で行われたため、エストニア語を練習することができたという。音楽学校ではエストニア語話者かロシア語話者かに関わらず、一緒に演奏をしていた。

高校卒業後、ニーナはタリン大学に入学し、政治科学を専攻する。彼女の高校は優秀な生徒が多く、周りの友人たちはドイツやフランスの政府によって提供された無償の教育プログラムを利用し、海外留学の道を選んでエストニアを去った。ニーナも1学期間スウェーデンに政治科学を学びに留学したこともあったが、音楽学校でキーボードを学んでいたこともあり、「なぜかわからないけどエストニアを去ることは考えなかった」。

大学での授業言語はエストニア語であり、勉強はエストニア語で行ったが、エストニア語に翻訳された文献は少なかったため、全て英語で文献を読んだ。大学ではエストニア人のグループと過ごすようになったが、その中に一人いたロシア語話者の女子学生とはすぐに仲良くなったという。一方で彼女は音楽の勉強も続けており、大学の友人たちの集まりに顔を出す余裕はあまりなかった。

大学卒業後、ニーナは同大学で事務の仕事を始め、現在も職場では彼女以外の全員がエストニア人である。だがプライベートなエストニア人との関わりは、現在ほとんどないという（以下カッコ内筆者補足）。

ニーナ：「(オレグの方を見て) 彼はいまだにロシア人（Russian）の友達だけいるんです(笑)」

オレグ：「ああ。」

ニーナ：「それでもこんな感じなんです。私たちには何人かのエストニア人の知り合いはいるけど、友達はいません。私の同僚は皆エストニア人で、私は彼らととても良い関係にあります。でも、それでもなんです(笑)」

ニーナは「エストニア語はとても重要だが、人生において学ぶべき唯一の事ではない」と話す。現在彼女は、5歳の息子をどの学校に通わせるかを考えている。彼はまだエストニア語を話すことはできない。息子には詰込み型ではないフィンランド式の参加型教育を受けさせたいが、ロシア語学校ではそのような学校がないという。そのためニーナは、2017年9月に開校する、エストニア語とロシア語の両言語教育を初めて採用する私立学校に、息子を通わせることを考えている。またエストニアで出版されているロシア語で書かれた本のレベルは低いため、ペテルブルクに行く友人に本を買ってくるよう頼むこともあり、息子にも読ませている。

ヴィクトル

ヴィクトルの両親は1988年頃からラスナマエに住み始めた。当時はすでにペレストロイカが始まり、アパートも有料になっていた。ラスナマエには2014年頃にスポーツセンターができたが、当時から現在に至るまで映画館やスイミングプールはなく、子供の頃には森の中でボールを使って遊ぶしかなかったという。サッカーやバスケットボールをしたが、チームはいつもエストニア人とロシア語系住民に分かれて対戦しており、エストニア人の友人はいなかった。1990年代の中頃には、ラスナマエでエストニア語を話せば殴られ、ロシア語をエストニアの地区で話せば同じことが起きるという話を、ヴィクトルはたくさん聞いていた。

父がユダヤ系であるヴィクトルは、幼稚園から12年生まで、弟と一緒にタリン中心

部のユダヤ学校に通ってロシア語で勉強し、一般的な科目の他にヘブライ語やユダヤの歴史文化も学んだ。ユダヤ学校の雰囲気は「大家族のよう」であり、先生と生徒の距離も近く、現在まで交流が続く友人もいる。ユダヤ人のための国際的な青年キャンプに参加し、他のバルト三国やイスラエルを無償で訪れることもあった。

エストニア語の授業は週に5～6時間あった。卒業時に受けたエストニア語の試験では100点中96点を取得し、帰化申請をしてエストニア国籍を取得したが、ラスナマエ地区に住んでいたためエストニア語の会話を練習する機会はなかった。何人かの友達は兵役に参加したことでエストニア語の能力が向上したが、ヴィクトルは事情により兵役には行かなかった。

ヴィクトルはタリン大学に進学し、ロシア文学とジャーナリズムをロシア語で学んだ。彼が学んだ学部は、エストニア人学生が学ぶフロアとはそもそも別のところにあったため、互いの交流は生じなかった。彼はロシア語で学んだことを「自分にとってあまり良くなかった」と振り返る（以下カッコ内筆者補足）。

ヴィクトル：「今でもエストニア語が流暢だとは思っていません。それは…それは悪いことですが、エストニア語で私は自分の仕事、値段のこと、車、天気について話せると感じていますが、より具体的なこと、心とか、より深いことについて話すのは難しくなります。なぜなら今でも私たちの社会はかなり分断されていて、ロシア語話者でエストニア社会における居場所を見つけた人は多くありません。またエストニア人も、ロシア語のアクセント（が混じっているエストニア語）や（文法が）間違っているエストニア語を（聞くことを）好みません。」

筆者：「彼らが好むのは」

ヴィクトル：「純粋なエストニア語です。」

筆者：「だから今でもエストニア語を話すとき居心地が悪いのですか？」

ヴィクトル：「ええ、ええ、そうです。だから私は、全てのエストニアの学校はエストニア語で授業すべきだと思うのです。全ての子供たちが成長して、自分たちは平等で、エストニア人と同じ権利や可能性があり、全ての状況において心地良く感じられるように願っています。」

ヴィクトルは、エストニアのロシア語話者たちがロシア語学校で勉強することの結果を、次のように捉えている。

ヴィクトル:「人生でより良い場所を見つけられるよう、かなり強い人になる必要があります。勇敢になりエストニア語を話すよう挑戦すべき…などなど。もしそういう勇敢さがなければ、悪い仕事に就いたりすることになるでしょう。」

だがヴィクトルはエストニア語が上達しなかったことを悔やみつつも、大学でジャーナリズムを学んだことはその後の人生に役立ったと感じている。20 歳頃までヴィクトルは「親ロシア的」な考えを持っていたというが、ジャーナリズムを学んだことで、メディアのプロパガンダに気付くことができ、今はロシアを訪れる必要性を感じていないと語る。ヴィクトルは大学卒業後、エストニア国営放送でロシア語のラジオの仕事などを経験した後、現在は同放送局のロシア語のテレビチャンネルでディレクターとして働いている。現在の職場では基本的に同僚や取材相手とロシア語で会話するが、エストニア人技術スタッフとのやり取りもあるため、エストニア語の良い練習機会があり満足しているという。

一方で近頃、エストニア人とロシア語系住民の間には意外な共通点があるとヴィクトルは指摘する。それは両者が、難民の受け入れや肌の色の違う移民、同性愛者について否定的だということである。現在、国会で極右政党が第三党になったことについて、「自分はユダヤ人で、ロシア語話者で、彼らが好きな人物ではない」ため、少し恐怖を感じているという。

イヴァン

イヴァンの家族は 1980 年代から、政府から無料で与えられたラスナマエのアパートに住み始めた。近所の小学校で週 2 時間ほどエストニア語の授業が始まり、その後 5～6 時間ほどになったが、教育の質は極めて低く、教師はなぜか指導に関心を持っていないようであった。エストニア人とロシア語母語話者の教師の両方がいて、半年ごとに担当が替わった。おそらくは安い給料がその理由であり、当時は個人レッスンで教えるほうが給料は良かったという。

エストニア人の友達とは全くおらず、一緒にサッカーで遊んだときには、試合中の速いエストニア語の会話についていけず、プレーが遅れ、メンバーを苛立たせた記憶がある。高校から都心部のギムナジアに通い、12年生になって初めて良いエストニア語教師と巡り合ったが、「遅すぎた」。高校卒業時点で英語はかなり流暢に話せていたが、エストニア語はそれに比べるととても下手であった。

エストニア芸術大学に入学するための試験は、実技とエストニア語の面接であり、面接はただ入学を志望する理由を聞かれるだけのもので、難しくはなかった。大学1年生のときにはまだエストニア語が下手であったが、そのときには自分自身を心地よく感じたいという気持ちがエストニア語を上達するモチベーションになっていた。エストニア語を話し始めるようになった転機は、2年生のときに8か月間参加した兵役であった。全ての訓練がエストニア語で行われ、それは司令官がロシア語話者でも同じであった。指示を理解できなかったり命令を上手く出したりできなければ腕立て伏せが待っていた。結果、8か月後にはエストニア語の会話がとても流暢になり、スラングを覚えるまでになっていた（以下カッコ内筆者補足）。

イヴァン：「今でも若い人たちが軍に行くのは良いことかどうか聞いてきたら、『ああ、もちろん。とても効果的な語学学校だよ』と伝えています。そうして私は話し始めました。ほとんどそれは心理的なバリアだったと思います。わからないけど、自分の下手な言語によって愚かで馬鹿になることを恐れていたんです。たぶん私のエストニア語はいまだに可笑しいと思います。たくさん間違えますが、でも怖くありません。使える場面ではたくさん使っています。だから私のモチベーションは、第一に軍で生き残ることで(笑)、第二に文化的な生活に入っていくことでした。この国ではエストニア語なしでは、文化的な生活に入ることはできませんから。」

一方で4歳離れたイヴァンの妹は、両親の意向でエストニア語の幼稚園、学校、大学に通い、エストニア語を完璧に話すといい、イヴァンは妹を「統合の成果物」とであると語る。

彼は現在、ラスナマエを離れてタリンの中心部で暮らす。イヴァンは「ラスナマエはロシア人ゲッターだ」とたまに冗談を言うが、実際にはゲッターであるとは全く感

じていないといい、ラスナマエに一つもカフェや映画館がないことに我慢ができないだけであるという。

イヴァンは大学卒業後、ロシア系、エストニア系の会社や多国籍企業など、様々な会社でグラフィックデザイナーとして働いた。現在7年間働いているITと広告を扱う多国籍企業では基本的に英語を用いるが、相手によって言語を使い分けており、そのことがビジネスでも役立っていると感じている。

しかしインタビュー当日、エストニア人との間である出来事があった。国際的なイベントに仕事で参加したところ、会場で出会ったエストニア人男性が英語であいさつをしてきた。イヴァンがエストニア語で返事をする、その男性は「あなたはエストニア人？」と疑いの目を向けてきた。「でもまあ、私たちは普通の会話を始めて、それだけです」とイヴァンは淡々と振り返る（以下カッコ内筆者補足）。

イヴァン：「毎度、私は自分のことをとても可笑しく感じます、なぜなら…いつも私は違ったふうに感じるからです。もちろんペテルブルクでは、私の完璧なロシア語の知識にも関わらず、人々は私が現地の人ではないと非常に上手く気づきます。私がアイスランドやイタリアに旅行したときには、私はエストニア人ですと答えました。でもエストニアにいるエストニア人にとっては、よくわかりませんが、彼らは私のことを『ああ、ロシア人（Russian）』と言います。でもいいんです。」

イヴァンはロシアの友人や親戚たちを訪れ、ロシアとの繋がりを保とうとしているという。ペテルブルクはロシアの文化首都であり、才能のあるアーティストが多いため、イヴァンはアーティストとしての自分の技術を向上させる機会があると感じている。タリンで売られているロシア語の本は質が低いため、ネットで購入したり、ロシアの書店を訪れたりすることもある。だが一方でイヴァンは、ロシアに住みたいという気持ちは一切持っていないという。

イヴァン：「ここに住むほとんどのロシア人やロシア語話者たちは、ロシアに住みたいと思っていません。私もです。私はただ、ロシアでとても居心地よく感じますが、でも私の場所はこちらなんです。私は自分の言語スキルと文化の知

識を、地元の人々を助けるために使いたいと思っています。」

イヴァンは、エストニア人の少年少女たちがロシア語話者の近くにいるとき、ロシア語の会話がわからないために居心地がとても悪そうにしているのを何度も見ている。また、ロシアやロシア語につながるものを嫌悪しているが、我慢しているエストニア人男性のことも知っている。もしバスの運転手がエストニア語で説明できなければ、怒り出すエストニア人もいるという。しかしエストニア語が少数言語である以上、エストニア人にはエストニア語を求める権利があるとイヴァンは考えており、自分もそのことについて気にしていないという（以下カッコ内筆者補足）。

イヴァン：「多くの外国人たちが私に『あなたは自分のことをどんなふうを感じるの？エストニアにいるロシア人男性（Russian guy）として感じるの？なにか差別はあるの？』と聞いてきます。どうやって直接的に答えたら良いのかわかりませんが…もしあなたがロシア人（Russian）なら、ここにいることが禁じられているというようなことはありません。ないです。でもビジネスで、あるエストニア人男性が興味深い情報を、気に入っている友人にだけ提供して、私にはくれなかったことがありました。わかりませんが、彼は私が彼の円の中にいると思わなかったんだと思います。これについて差別だということもできますが、一方では、皆、適切な人を仕事に選びたいと思うので、自然なことだと思います。」

「この国では、文化的な生活や公的な仕事をしたいのなら、エストニア語を知っていなければならない、そのことから逃れることはできない」とイヴァンは言う。一方で彼は、自分は法の下に平等な国で生きたいのであり、白か黒かで判断するようなモノカルチャーの国民＝国家には生きたくないと語る（以下カッコ内筆者補足）。

イヴァン：「法律があってそれが最も重要なものです。でも他のことは、OK、確かにあなたは伝統を尊重しなければならない。でも、尊重というのは伝統に従うことではなく、その中心となるものを取り出すことです。それは（押し付けられることなく）一人ひとりの選択です。こんなことはつきりし

ています。」

レフ

レフはタリン中心部で生まれ育ち、近所のロシア語学校に通った。1年生から週に4クラスほどエストニア語を学び、学年が上がるにつれて授業の量は増えていった。教師はロシア語話者とエストニア語話者の両方がいた。学校とは別に、エストニア人が多く集まる青少年キャンプに参加してエストニア語を話していたが、普段の友達はロシア語話者であり、高校卒業時点ではエストニア語の会話は流暢ではなかった。

高校卒業後、レフは美術教師の道を目指してタリンの大学に入学したが、やがてその進路の関心を失い1年で退学した後、スペインを1年間旅行した。彼はスペインで環境学に関する様々な知識を得た後、タリン大学に入学し直し、学童教育を専攻した。授業は100%エストニア語の授業であったため、彼は大学で追いつく必要があった。

大学入学後、レフのエストニア語が向上するきっかけとなったのは、エストニア人の芸術家たちが滞在制作をしていた芸術施設に顔を出すようになったことであった。環境問題に興味があったレフは、そこで環境学に関するイベントなどを企画した。転がっていたタイヤを拾って花壇にアレンジしたり、古い紙を加工してインテリア用品にしたりする活動の中で、レフは多くのエストニア人やロシア語話者の青年たちと関わるようになっていった。また、イタ・ヴィル県の実環境保護 NGO と協同し、彼らが制作した環境保護に関するロシア語のリーフレットを、レフたちがタリンで配布したこともあった。当時はエストニア語でならエコロジーに関する情報を入手することはできたというが、ロシア語しかわからない人々には情報にアクセスすることができなかったため、レフはこの活動の重要性を認識しているという。

友達には兵役に行つてエストニア語が上達した者もいたが、彼は当時自分のやりたいことに忙しく、「ヒッピーっぽい人間だったから」兵役に行くことに関心はなかった。彼は入隊試験で身体的に不自由であるかのように振る舞って免除された。だが現在は、兵役に行くことを拒む理由は感じておらず、「もっと若ければ、今なら行くだろう」と語る。

彼のエストニア語は環境保護のプロジェクトを進めていく中で上達したが、自然な表現が身につくには時間がかかった（以下カッコ内筆者補足）。

レフ:「オフィシャルな用語を使って (NGO の) 申請書類を書くことはできましたが、ストリートの言葉で自分を表現することは苦手でした。政治家みたいに話していたと思います。たくさんのエストニア語話者の友達が、私のエストニア語がとても上手いと褒めてくれました。新聞からプロジェクトについて取材を受けたとき、私のエストニア語はとても上手かったのですが、取材後の彼らとの会話ではスラングが出てきたから『何だ?』となって。居心地が悪かったですね (笑)。」

環境学に関する活動はエストニア国内に留まらなかった。レフはフィンランド、ロシア、エストニアの約 35 人の青少年を招き、バルト海の保護を主なテーマにサマーキャンプを実施した。ペテルブルクにも赴き、地元の青少年向けに環境保護に関するプログラムを企画してレクチャーをしたこともあるという。だが普段はロシアへ行くことに興味は持っておらず、政治的に見れば「危険な国だと思う」と話す。

レフは英語で卒業論文を書いた後、フランスで青少年活動に関する仕事を 3 年間行い、タリンに帰ってきた。現在は技術者として、エストニアのみならず欧州諸国を忙しく飛び回って仕事している。現在彼が勤めている会社の同僚はロシア語話者だが、仕事ではエストニア語、英語、ロシア語、フランス語を使うこともあるという。

マリ

マリは 2～3 歳の頃から、エストニア人の祖父とエストニア語を話し、両親や祖母とはロシア語で会話していた。4 歳からロシア語幼稚園に通うまでは、両言語の違いが分からず混ぜて会話をしていたため、両親はマリが話していることを理解できていなかったという。

1992 年頃にロシア語学校に進学したマリは、1 年生から 12 年生までエストニア語を学校で学んだ。生まれた頃はラスナマエに住んでいたが、両親の離婚を機にタリンの北部に母と引っ越し、その後二度転校を経験する中で、ロシア語母語話者とエストニア人の両方の教師からエストニア語の授業を受けた。学校によって授業時間は異なっていたが、エストニア語の授業は週に 3 時間程度であった。

学校の友達もロシア語話者のみであったが、毎年夏休みに通っていた郊外の別荘では、エストニア人の子供たちと遊んでいたため、エストニア語を練習する機会があっ

た。マリの家族の別荘があった地域では、政府から与えられていた別荘用の土地は、なぜかロシア語系住民とエストニア人とで分離されていた。マリの家族は民族的にエストニア人であったため、彼らの周りの別荘にはエストニア人家族しかおらず、数 km 離れたところにロシア語系住民たちの別荘があったという。

しかし高校卒業時、マリはエストニア語にあまり自信はなかった。エストニア芸術大学を受験したが、第一段階のエストニア語の面接試験で怯え、落第した。「今でもなぜエストニア語が上手くなかったのかわからない、英語の方が上手かった」と彼女は笑って当時を振り返る。

他の大学に通う気はなく、また浪人はしたくなかったため、マリは同大学の夜間部を受験した。通常の昼間のコースの授業料は無償で夜間部は有料であったが、後者は制作の実績があれば合格できたため、マリは夜間部に通い始めた。クラスにはエストニア語話者とロシア語話者の両方がおり、全ての授業をエストニア語で受けたが、理解できないことがあればロシア語で質問ができた。

マリが最も苦勞したのは、芸術史や理論の授業であった。エストニア語では半分の内容しか理解できず、彼女は追試を繰り返し受けた。小さい頃から通っていた芸術教室で、ロシア語では芸術史について勉強していたが、同じ芸術家や絵の名前でもロシア語とエストニア語では全く異なる響きに聞こえるため、知っている内容でも全てが新しい情報に感じられた。

やがて修士課程に進学したマリは、修士論文をエストニア語で書くことを決意する。「上手く行こうが行かなかろうが、できるだけ自分で書こうと思って」、ネイティブスピーカーの友達に添削してもらった。修士論文の大きなテーマは「寛容さについて」であった。マリ自身の個人的な経験や家族について、エストニア語とロシア語のメディアがどのように衝突しているのかについて論文に示した。また、旅行先で知り合った、アイルランドやスペイン、ベルギーに暮らす少数言語話者たちにもインタビューを行い、映像作品として提示した。

筆者：「あなたはそのテーマに関心があったということですか？」

マリ：「ええ。私は自分が誰なのかについて理解したかったんです。どこに所属するのか。誰かに、私は存在して、私はこのようであると説明したかった。私はミックスファミリーの出身で、寛容な人間です。他の人がなぜ寛容でないのか理解

できなかった。」

筆者：「書いた後に変化を感じましたか？」

マリ：「私が感じたのは、私は自分のことを隠していたことです。私は何か自分にとって重要なことを書いて、より楽になったと思います。このトピックについてリラックスしました。私にとっては…癒す過程だったというか。たぶんそんなふうに呼ぶこともできると思います。家族や自分の経験について書いたからです。」

マリは、オレグとニーナが発行する無料雑誌にも、イラストや記事を時々提供している。また彼女は 2015 年と 2016 年、エストニア社会の不安定さをテーマとした現代アートの展覧会をキュレーションし、エストニア文化庁からの支援を受けてタリンとイタ・ヴィル県のナルヴァで展示した他、在ロシアエストニア大使館からの招待を受けモスクワでも展示を行った。マリは展覧会で、自らの作品も展示した。ロシアの国旗を成す白、青、赤色の舌を持つ人物と、エストニアの国旗を成す青、黒、白色の舌を持つ人物がキスをしている様子を描いた彼女の絵は、ロシア語話者とエストニア語話者の融和を願う作品となっている（以下カッコ内筆者補足）。

マリ：「私はそのとき（タリンでの展覧会のとき）30 歳で、それまでは、どうしてロシア語話者の人たちは文化的なイベントに顔を出さないんだろうってずっとわからなかったんですが、この時にはロシア語話者の人たちもたくさん来てくれて、彼らに関心を持ってくれたことがうれしかったです。それまで公の場でロシア語を話すことに、ロシア語を不快に思う人もいるから緊張感というかプレッシャーのようなものがあって、でもそうになったのは私の責任ではないのにとっ
ていました。このイベントの成功を私はとても誇りに思いました。」

彼女がロシアを初めて訪れたのは、2016 年 5 月に、展覧会の打ち合わせのためにモスクワに行ったときであった。彼女は「外国にいるのに、皆が私の母語を話しているのが不思議な感じがした」という。マリはモスクワで、エストニアの本屋では手に入らない、現代アートの思想に関する本を 10 冊ほど購入した。モスクワのような大都市にもいつか長い期間滞在してみたい彼女は話す。一方、毎年 5 月 9 日、ロシアで行われている戦勝記念日のパレードは「馬鹿げている」と強い嫌悪感を示しており、ロシ

アに住みたいという気持ちは持っていないという。

アンナ

アンナの実家はラスナマエの東部にある。アンナは同地区にある幼稚園と小学校に短期間通った後、エストニア語を学ばせたいという両親の方針で、2年生から高校卒業時まで市の中心部にあるエストニア語学校に通った。彼女にとっては今や、エストニア語とロシア語の両方が母語であるという。彼女は家族全員とロシア語で話すが、二人の祖母がエストニア人であるため、家庭でも祖母からエストニア語を教わっていた。両親はロシア語が母語であるが、アンナのエストニア人のボーイフレンドが家に来るときは、エストニア語で会話することは可能であるという。

アンナの通った学校で授業は全てエストニア語で行われたが、校風はロシア文化やロシア語にも理解があった。両親はアンナがロシアのルーツを持つがゆえに学校で差別されるのではないかと恐れていたというが、彼女の学校では差別は起きなかった。彼女はラスナマエに住み続けていたが、近所の子供よりも学校の交友関係の方が活発であった。学校を卒業した現在も、エストニア語学校の友人たちとは親しい繋がりがあるといい、互いの結婚式にも参加している。

アンナはその後、エストニア第二の都市・タルトの大学に進学し、修士課程はタリンに戻りエストニア芸術大学で都市計画を学んだ。彼女は実家を離れた今でも、都心により近いラスナマエの西部に住み、都心部にある政府系のシンクタンクで働きながら、都市計画に関する NGO 活動にも取り組んでいる。シンクタンクの職場は全員エストニア人であり、唯一ロシア語ができる自分が仕事の上で重宝されているとアンナは感じている。またラスナマエで NGO 団体が展開している活動では、両言語を用いながら地域住民の交流の場を設けたり、地区の景観について行政と意見交換を行ったりしている。ラスナマエに古くからあり人々に馴染みのあったアーチが、大型スーパー拡張のために取り壊されることになったとき、アンナの NGO はラスナマエの個性がなくなることを危惧して決定に反対し、スーパーの責任者側に協議を申し込んだこともあった。

彼女はかつて、ラスナマエとロシア人（Russian）の間、ラスナマエとソ連の間には等号が置かれており、ラスナマエがネガティブなシンボルであったと理解している。だが現在はラスナマエも変化を続け、緑が増えて新しい住居も増えてきており、「ゲッ

トー」ではないとアンナは感じている。

ユーリ

ユーリは9名の中で唯一、イタ・ヴィル県の町の出身である。彼の両親は親戚の勧めにより、ロシア語話者の子供たちがエストニア語のみでネイティブスピーカーの教師から授業を受ける、言語集中訓練プログラム（immersion program）を採用する学校にユーリを通わせた。ユーリは1年生から12年生まで、一部の授業を除いて基本的に全ての授業をエストニア語のみで受けた。エストニア語の文法は非常に難解で今でも時々間違えることもあるというが、プログラムのおかげで特に問題は感じていないという。

ユーリの転機となったのは高校卒業時に受けた大学進学のための試験であった。当時彼は医学部進学を希望していた。生物学と化学の試験の他に、母語でエッセイを書き、外国語でリスニングやスピーキングの試験を受ける必要があった。ユーリは言語集中訓練プログラムの学校にいたため、エストニア語を母語、ロシア語を外国語として選ぶか、ロシア語を母語、エストニア語を外国語として選ぶかの選択肢があった。ユーリのクラスメイトたちはエストニア語を母語として選択したが、ユーリはロシア語を母語として選択しロシア語でエッセイを書くことになった。だが彼はロシア語の文法に少し問題を抱えていた。

ユーリ：「もし複数の言語を長い間学んでいたら、混ざり始めるんです。母と父は時々、私がロシア語を話していてエストニア語の単語を使っていないときでも、その文章は奇妙だ、エストニア語みたいだと言っていました。」

結果、ユーリはロシア語のエッセイで高得点を取れず、医学部に進学することはできずに生物学部に進んだ。大学1年生のときに医学部に入り直そうともう一度ロシア語のエッセイに挑戦したが、またも上手くいかなかった。医学部に比べ就職に少し不安はあるが、現在は生物学と遺伝学の研究を楽しんでいるという。

イタ・ヴィル県にある故郷を出てタルトの大学と大学院に進学してから、ユーリには多くのエストニア人の友人ができた。タルトはエストニア語話者が多数派を占める町である。イタ・ヴィル県の学校に通っていた頃は、言語集中訓練プログラムでエス

トニア語の筆記と読解が鍛えられていたが周りはロシア語話者であったため、エストニア語の会話には少し問題があった。だがタルトに来たことで、彼はエストニア人の友達との付き合いが増えて劇的に会話能力が向上し、「今はエストニア語がとても上手いと言うことができる」という。

また、ユーリは大学3年生のときに兵役の召集を受け取ったが、健康上の理由で参加しなかった。それでも兵役に参加した友人たちの中には、訓練を通じ統率能力が向上し、大学の成績にもプラスの効果が出たと感じる者もいたと言い、自分も健康であれば参加することは気にしなかっただろうと感じている。

タルト大学の修士課程に進学した後、ユーリはモスクワの大学へ1年間の交換留学を経験した。修士で1年学んだ後、働き始めるか博士課程に進むか迷っていた彼は、留学が学生としてどこかを旅する最後の機会であり、学問的知見を広めたいと思っていた。ブルガリア、ルーマニア、ポーランド、モスクワという選択肢の中から、母語で学べる大都市であるモスクワを選んだ。

ユーリ：「自分のエスニックな国の一部であるモスクワに、それまで行ったことがなかったんです。たくさん文化的なイベントや歴史的な場所があることを聞いていて、訪れて住んでみたいと思っていました。」

ロシアの授業は口頭試問が中心であることがエストニアとの大きな違いであったというが、劇的な変化は感じなかったという。筆記だけではなく、討議をするタイプの試験のやり方はとても良かったとユーリは評価する。一方、電子政府が機能しペーパーレス社会が実現しているエストニアに比べ、ロシアでは大学の寮の入居時に様々な書類とサインが必要であった。彼はそれについて「ロシア人（Russian）は紙が大好きだ」と話すが、「官僚主義はどこにでもある」ことで、それほど気には留めていない。また留学生活ではロシア人だけでなく、得意の英語を生かしヨーロッパ圏からの友人も数多くできたこともあり、ユーリは留学に総じて満足している。

(3)「統合」に対する評価

本項では、「統合」の停滞が顕著になった2007年の「銅の兵士」像移設事件をめぐる記憶と、「統合」という言葉を聞いて各個人が持つイメージを基に、それぞれの「統

合」に対する評価を記述していく。

ニーナ

ニーナが兵士像移設事件のニュースを知ったのは、兄と部屋でテレビを観ているときであった。自分たちに極めて近いタリンの中心部で暴動が発生したことにショックを受けたという。政府からは外出を控えるよう勧告する SMS が送られてきた。翌日の職場の雰囲気は彼女は記憶している（以下カッコ内筆者補足）。

ニーナ：「緊張感のようなものが空気にありました、ロシア語で話すことが怖かった。

そしてエストニア人たちはエストニア語で話すことを怖がっていました(笑)。

もし私がロシア語を話したら、皆は、私もまた彼ら（暴徒化したロシア語系住民）の一部と思うだろうと感じました。通りでもエストニア人たちはそんな感じでした。誰も話したがらず、お互いを見ようとしていなかった。」

筆者：「沈黙していた。」

ニーナ：「ええ、非常に閉じていました。私の職場には、60 歳を越したエストニア人の女性がいました。彼女はイタ・ヴィルマ県で育って、子供の頃もしバスでエストニア語を話すと、『なんでエストニア語を話すんだ？ロシア語を話すべきだ』というようなことを言われたそうなんです。だから彼女は、『もしロシア人（Russian）がエストニア語を話さないで法律を尊重しないのなら、彼らをロシアに行かせよう』という考えでした(笑)。」

ニーナはそれを自分にとって「かなり攻撃的な考えだった」といい、「エストニア人の間だって法律を尊重しない人はいる」と話す（以下カッコ内筆者補足）。

ニーナ：「一般的な結論をロシア人（Russian）に対して下すべきではありません。たった 1,000 人くらいのロシア人（Russian）があるやり方でふるまっているのを見て、『どうしてロシア人（Russian）はこんなにひどいの？町の中心部に赤い旗（ソ連の国旗）を持って彼らはやってくる。ここに住むのが嫌なら出ていけ』と一般化する、そのことに彼女は熱心でした。」

兵士像移設事件において彼女にとって重要であったのは、政府が人々に十分な説明をせずに移設を強行した、その振る舞いが非常に無礼であったということだという。

また、ニーナは 2015 年に始まった国営放送によるロシア語のテレビチャンネルをある程度は評価しているが、政府の対応は少し遅すぎたという。「統合」はもう過ぎたトピックだと彼女は話す（以下カッコ内筆者補足）。

ニーナ：「今はもう皆が統合にうんざりしているんです、誰もそれほど気にしません。

だってもうすでに 27 年間、私たちは独立国家なんです。私たちがここにいて住んでいるなら、ここは私たちのホームです。そして私たちはエストニア語話者より劣っていない。政府はいくつかのグループに人々を分けようとします、特別なグループではなくて、言語のグループです。このことは普通じゃありません。いまだに『さあ、ロシア人 (Russian) のことをどうしようか？』って。ロシア人 (Russian) には何もすべきじゃないんです(笑)。『彼らが忠誠的になるには？』というようなことをまだ話しています。彼らがこんな質問をいつも聞くなんで、本当に変です。」

ニーナには、40 歳以下の若手のロシア語系住民たちは、子供をエストニア学校に通わせるなど、よりエストニア社会に統合されているように見えるという。そのため年上の世代を除いては、コミュニティの分断が生じているかどうかはわからず、ニーナ自身も日常的には何の問題もないという。

オレグ

オレグは当時大学生であり、兵士像移設事件の前日は試験のため徹夜で勉強をしていた。試験が終わった日は帰宅して一日中眠り、夜にインターネットに接続したとき、事件が起きたことを知った。実際に騒動を目撃した友人の何人かが当時の状況を教えてくれたというが、事件についての情報は少なかった。オレグは 2 日目に仲間と旧市街の方を見に行ったが、その日は非常に落ち着いていた。事件の初日では、警察はただ通りを歩いていた人々を多数拘束したため、多くの人々がそれをトラウマとして記憶しているという。兵士像を移設するニュースを聞いたとき、オレグはそれが悲劇になるだろうと感じていた（以下カッコ内筆者補足）。

オレグ：「政府は人々を機械的に、ロシア人（Russian）とエストニア人に分断し始めたんです。兵士像は触媒のようなものでした。ニーナが言ったように、最初の日に私たちが目にしたのは、政府はやりたかったことを完璧にやったということでした。彼女が言ったのは、彼女はロシア語を話すのを恐れて、エストニア人たちはエストニア語を話すのを恐れたということです。それが上手く行ったということです。今でも私はそれをととても悲劇的なことだと思っています。ロシア人（Russian）とエストニア人のコミュニティは遠く遠く離れてしまって、今や私たちは非常に隔たったところにいます。」

筆者：「以前に比べて」

オレグ：「前はもっと近かったです。」

ニーナ：「多かれ少なかれ。」

一方でこの分断は特に 40 代以上の人々にあてはまることであり、もっと若い人々の間では分断は深刻ではないと二人は感じている。オレグは「統合」について次のような意見を持っている（以下カッコ内筆者補足）。

オレグ：「うーん…『統合』という言葉は、二つの文化の共存であって、お互いの優れたところを取り入れることだと思います。でも現実を考えると、政府は人々を統合したいのではなく同化したいとだけ考えているので、ここでは作用していません。彼らは一方向だけで満足できてしまうんです。全てのロシア文化に関する物事は、エストニア文化にダメージを与えるというようなことを彼らは考えています。エストニアの統合は上手く行っていないと思います。私はこれに満足していません。若いロシア人の子供たち（Russian children）はエストニア社会に統合されているので、その方向だけは作用しているかもしれませんが。でもロシア人の子供たちが持つ、ロシア文化に関係する全てのことは、エストニア社会やエストニアの文化的風景において居場所がないと思います。両方向ではなく一方向なので、これは統合ではなく同化と呼べるんです。」

イヴァン

イヴァンは自分の目で兵士像移設事件を目撃し、現場でデモに参加していたが、警察が人々を攻撃する 15 分くらい前には去っていたので身は安全であった。この事件はロシア語系住民たちにとって悲劇的なことであったと言い、「心理的に、自分の人生の中で最悪のことだった」と振り返る。当時のエストニア大統領で現在は欧州委員会の委員であるアンシプは法で裁かれるべきだといい、「アンシプは自分にとって最悪の人物」だという。イヴァンにとっては、兵士像自体や、兵士像を移設する決定は自分にとって重要ではなく、政府が何の説明も対話の場も設けず、深夜に移設を強行したやり方が非常に問題であったと感じている。10 年前に人々が隔絶し始めたことをイヴァンはいつも覚えているという。彼はロシア語系住民の統合について次のように述べている（以下カッコ内筆者補足）。

イヴァン：「公式的なヴィジョンでは統合は両方向が参加することを意味します。でも実際には、もちろん一方通行で、エストニア化です。エストニア人はロシア人を全く気遣っていません、全く。」

筆者：「全く？」

イヴァン：「ええ、なぜならそうしなくていいからです。実際には多くの人々にとって統合とはロシア語系住民の同化です。最も重要なことは、物事を今のところはそのままにしておくことだと思います。公式的に（政府が）何も変えようとしません。」

エストニアで近頃より問題になっているのは、シリアなどからの難民の受け入れであり、ロシア語系住民の問題より複雑であるとイヴァンは感じている。そのような中で、イヴァンは「エストニア人の人々がロシア人（Russian）を信頼し始めるのを見た」と希望を述べる。イヴァンはエストニアの状況は良い方向に向っていると信じており、普段の生活に特に問題はなく、その点については楽観的だと話す。

実際に彼は毎週水曜日の夜、Wednesday Sketch という無料のイベントを主催している。様々な人が自由に集まり、お互いの顔をスケッチしたり、モデルを呼んでデッサンを描いたりするのが目的のイベントである。2017 年の 2 月に一度だけ筆者が参加したときには、20 人ほどが集まり、エストニア語話者、ロシア語話者など様々なルーツ

を持つ10代から30代までの若い参加者の姿があった。レフやマリも時々参加しているという。イヴァンの目的は「統合」ではなく、あくまで楽しみのためであると話す。

イヴァン：「この国際的なイベントを開催していることをとても誇りに思っています。様々なナショナルリティの人が参加しているので、公式的にはいつも英語を使います。ロシア、ウクライナ、ラトヴィア、エストニアとかです。たとえば私はエストニア語でアナウンスしたくないんです、そうすれば他の人を排除してしまうことになりますから。だからこれがやり方なんです…。エストニアで英語は、全ての人のための言語なんです、若い人だけに当てはまることです。」

ヴィクトル

当時20歳であったヴィクトルは、「かなり親ロシア的な考えを持っていた」という。兵士像の移設が起きたとき、彼は移設に反対していた人たちをサポートするために現場にいた（以下カッコ内筆者補足）。

筆者：「あなたが兵士像の移設に反対するデモに参加したのは、兵士像があなたにとって重要だったからですか？」

ヴィクトル：「ええ、もちろん重要でしたよ。（間）うーん…。私はそれを自分の大きなロシア文化（Russian culture）の一部であると考えていました。（間）どう表現すればいいのか。難しい質問ですね。なぜそれが私にとって重要だったのか。（長い間）うーん…。兵士像はロシア人（Russian）にとって、『私たちは強い国家である』というようなことを感じさせるシンボルだったと思います。『私たちは勝者、国家の勝者である』と。」

エストニアの独立後の7～8年間はエストニア系とロシア語系の間には歩み寄りがあったとヴィクトルは感じていた。しかしこの事件以後、両者の隔たりは大きくなったという。

大学でジャーナリズムを学び、メディアの見方を学んだというヴィクトルは、現在はロシアのメディアのプロパガンダ性に気づき、親ロシア的な考えを持っていない。

彼はロシア語系住民が対ナチス戦の勝利を祝う 5 月 9 日が、エストニア人にとってはナチスによる一つの占領が終わり、次の占領が始まった日だと理解している。一部のロシア語系住民が、第二次世界大戦の悲劇を振り返るのではなく、単に強さのシンボルとしてアルコールを飲んだり踊ったり花火をすることに、ヴィクトルは反対している。「いまだにロシアの一部になることを夢見ている人々は、悲しくて愚かだ」という（以下カッコ内筆者補足）。

ヴィクトル：「(ロシアの一部になろうと夢見るロシア語系住民たちは) 非常に攻撃的な文化です。だからエストニア人は地元のロシア人 (Russian) を恐れます。私がエストニア人と関わる時に少し居心地が悪いのは、彼らが私の中に敵を見ていると感じることがあるからです。彼らは私のロシア語のアクセントを聞くと、私がエストニアの独立を支持していない、というようなことを考えるのです。」

ヴィクトルは、多くのロシア語系住民が「統合」を「同化」だと捉えているということに理解を示したうえで、次のように話す（以下カッコ内筆者補足）。

ヴィクトル：「個人的なことを言えば、私は『統合』の意味を知っています。だからこの言葉の中に悪いことは感じません。ですが...商業的な新聞やウェブサイトはクリック数に興味があるので、彼らは挑発的な記事や見出しをつけ、ほとんどはエストニア人がロシア人 (Russian) に怒りを持つように仕向け、もしそれがロシア語のサイトなら、その逆に仕向けています。もし政府のレベルで『統合』について話すなら、私にはほとんど幻想に見えます。私たちは EU や多くのヨーロッパの基金からお金を得て、私たちは統合のために何か良いことをしているとヨーロッパに示さなければいけないのです。でも実際のレベルでは、今はそれほど上手く行っていないです。第一に人々の意識を変える必要があります。もっとエストニア人になれとって、お金を単に与えることはできません。」

ニコライ

ニコライは兵士像移設事件を、政府が人々を分離し始めた分岐点であったと振り返る。ソ連崩壊以降の 15～16 年間余り、ロシア語系住民とエストニア系住民の仲は良くなってきたとニコライは感じていた。なぜ政府が兵士像の移設に踏み切ったのかが理解できないと、ニコライは強い口調で政府を批判する。彼は兵士像が敬意に欠けた扱いをされたことに怒りを感じており、「全てのロシア人 (Russian) が今でもそのことを覚えていて忘れられない、顔を殴られたようなものだ」と言う (以下カッコ内筆者補足)。

ニコライ:「私たちにとって兵士像はとても重要なものだったんです。私の祖母の家族は、第二次世界大戦でナチスに殺されました。祖母はそのとき 12 歳で、彼女の両親と姉妹が連れ去られて地面に生き埋めにされたんです。それぞれのロシア人 (Russian) 家族にこういうストーリーがあって、誰かを亡くしています。周囲が安全になった後、祖母は地面を掘り起こしたんですが、もちろん彼らは死んでいました (ヒットと窒息する仕草)。祖母は私に、彼女がどうやって母親を地面から出したか、そして母親の舌がおかしな方向にいていたことを話してくれました。ひどい話です(笑)。その話は私に強い影響を与えました。祖母はたった一度だけ、私が 20 歳の頃にそのことを私に話してくれたんです。話すことはとても辛かったと思います。それ以降、彼女はもう二度とそのことを話していません。」

彼は政府による「統合」を批判し、自身の身近な「統合」に言及する (以下カッコ内筆者補足)。

ニコライ:「自分は賢い人間じゃないけど、統合がお互いに歩み寄ることだということは理解しています。でも実際はエストニア人からロシア人 (Russian) への一方的な方法で、統合じゃない。お互いに歩み寄って話し合うべきです。でも彼らはただ『あなたたちは統合されなければならない』と言う。でもどこへ(笑)? 奇妙です。EU から統合のためにたくさん金をとって何もしないで、金を盗んでいるようなものです。紙の上では機能しているかのよう

に見えますが、実際には紙の上だけです、私みたいな人を見てください。
わかりません(笑)、統合なんて何も見えない。本当の統合は私と（エストニア人の）ガールフレンドです。私たちは仲良く一緒にいます。英語によって統合されているんです。」

マリ

事件初日、マリは当時兵士像が立っていた広場に来ていた。政府がその日に兵士像を動かし、人々が広場に集まってそれを防ごうとするだろうという報道にマリは接していた。兵士像がどこに移設されるのか、その日は誰も知らなかった。「兵士像を動かされたくない人々を見て、守りたかった」と彼女は言う。しかし最初に投げられたガラス瓶がマリの頭の近くをかすめたとき、彼女は帰宅を決意した。マリは当時のメディアの様子を次のように記憶している。

マリ：「メディアは狂っていました。お互いに罵って、一方のメディアを見れば、皆がもう一方は間違っていると言っていました。皆、間違っていたんです。両方のメディアがお互いに正しくないと言いあっていたので、空気中には嫌悪感がありました。人々が実際に、『おまえたちは正しくない』と言い合っているような感じでした。とても難しかったです。そういうことを経験しました。私はアクションには参加していないけれど、私の母語はロシア語なので、いきなり『彼女はあっち側だ』という檻に入れられたようでした。」

兵士像の移設を選挙の公約に掲げていたアンシプと特殊警察は、移設場所を知らせることなく移設を強行したことは間違いであったと後に認めた。一方でマリは、「場所を事前に知らせればそこで何か起こると政府は考えていた」と振り返り、彼女はその考えに同意しないという。

またマリは、ロシア語系住民にとって兵士像が重要なシンボルであったことに理解を示しつつも、自分にとって兵士像は重要ではなかったという。

マリ：「すべての抵抗運動は、私には死体をめぐる争いに見えるんです。もうすでに死んでしまったもののために戦っている。そして兵士像は、戦争で亡くなった人

への敬意の気持ちを表すものから、政治的な物体に変わってしまいました。親戚などを思い出すためのものから、政治的なゲームを操作するためのものになってしまったんです。」

マリは、実際にエストニアで起きている「統合」が、エストニア人からロシア語系住民への一方向のみであると考えている。彼女はそのうえで、両者の歩み寄り方について次のように述べる（以下カッコ内筆者補足）。

マリ：「私は自分の（企画する現代アートの）展示に関して、エストニア語話者とロシア語話者、両方に関心を持ってほしいです。彼らが歩み寄るには、言語を使わない共通の取り組み…なんでもいいんですが、絵とか、音楽とか、スポーツとか、そういう風に時間を共有できる場所が必要だと思います。今まで学校はエストニア語の学校とロシア語の学校で分かれてしまっていたから、大学に進学して初めて彼らは知り合っていました。たぶん今の若い人たちは、もっとうまくやっていると思うんですが。」

レフ

兵士像移設事件発生時、仕事で3週間のイスラエルに滞在していたレフは、携帯がエストニアからのメッセージだらけになったという。彼はロシアとヨーロッパ、両方のテレビを観てみたが、前者は非常に攻撃的で、後者はあまり明快ではなかった。両親に電話すると「心配するな」と言われたが、「実際は怖がっていて、きっと私を心配させたくなかったのだと思う」とレフは振り返る。

レフにとって兵士像は重要ではなく、いかなる体制も支持していないと話す。だが歴史的なモニュメントには触れない方が良く、移設を強行した政府のやり方は最善ではなかったと考えている。事件から1年間は空気に緊張感があり、人々から笑い与会話が減っていたのをレフは覚えている。一方、彼が最近20代前半の若者たちと話していて感じるのは、彼らの間で分断は生じておらず、「統合」はすでに実現されていることだという。

レフ：『統合』の重要性について訴える人が出てくるというのは、自然なことだろう

と思うんです。私個人のことで言えば、『統合』という言葉は大嫌いです。私はエストニアで、ロシア語話者の人々の同化が起こるとは信じていません。確かにエストニアでは、エストニア語を公用語として教育することが、ロシア語話者の人々に対する同化政策だとして反対する人がいるけれど、そうは思いません。なぜならエストニアはロシアと国境を接しているし、どうしたって文化的な接触はこれからもあり続けるでしょう。それにこんな巨大なエスニックグループが、それぞれのルーツを忘れ去るということは不可能です。」

レフが環境学のワークショップで掲げた目標は「統合」ではなく、あくまで環境学についての理解を深め実践していくことであり、「統合とは何か共通のことを行った結果、自然に発生する副産物だ」と話す。

レフ：『『統合』というのは、とてもオフィシャルな用語ですよ。この言葉は、EU からエストニアに出される予算に関する文脈で使われます。個人的な利益のために、『統合』という言葉を用いて活動しようとする『NGO ビジネスマン』もいます。『統合』という言葉を使えば、支援を得やすいから。誰も読まない『統合』のリーフレットを作って、そのための資金を EU に要請する。EU の予算を吸い取るための一種の企みです。だから『統合』という言葉は恐ろしいんです。人々に『統合』を押し付けることは決してできない。『人々皆が仲良くすること』がプロジェクトの目的だなんて、奇妙でしょう？」

ユーリ

タリンでの事件の後、ユーリが住んでいたイタ・ヴィル県の町でも暴動が起きたのを彼は目撃したが、「もちろん参加しなかった」。事件についてロシア語母語話者の友達とも話しあったが、ほとんどの友達は事件に対し否定的な反応を見せていたという。家族とはエストニアメディアとロシアメディアの両方から情報を得るようにしていた。兵士像の移設のされ方自体が、何の神聖な式典も行わず覆い隠された状態で実行され、敬意に欠けていたとユーリは記憶している。エストニア人とロシア語系住民の間で兵士像の捉え方は異なっていることを彼は指摘し、どちらの側も妥協したとらないという。

筆者：「事件の後、二つの言語グループの緊張感は変わったと思いますか？」

ユーリ：「ええ、私が思うのはただ…わからない、最近は夫婦の間の喧嘩みたいなものです。怒鳴りあったけど今は落ち着いています。近頃は皆、少し落ち着いたと思います。もちろん私たちには文化的な違いや歴史的論争がありますが、皆もっとリラックスしています。私はいつも、それについて話すことを避けています。誰かと話すときはほとんど、食事とか映画のことについてです。」

この話題は非常にデリケートであり、それぞれが強固な考えを持っているため、中立的なことを話した方が良くユーリは感じている（以下カッコ内筆者補足）。

筆者：「『統合』という言葉を知ると、どんなイメージがありますか？」

ユーリ：「ああ、ただ教室で座って関心のないエストニア語の詩を聴くことです（少し笑う）。私はエストニアの市民で、エストニアを愛している、エストニアを愛しています（繰り返す）。私を外国人に落とし込む必要はないですよ、（エストニアの）たくさんの方を尊敬していますから。でもエストニアのいくつかの文化的な物事を大好きになることはできないし、ロシアの文化的なことについてもそれは同じです。私はきわめて統合された人間です。エストニア語を話し、たくさんの方の文化的な物事を知っていて、住んでいるところの文化を尊敬しています。でもロシア人（Russian）としての立場もまた守りたいんです。」

アンナ

兵士像移設事件は学校のすぐそばで起きたというが、彼女はそのとき自宅にいた。実際に事件を目撃したわけではなく、写真や動画を見たという。彼女は当時のメディアが、非常に極端で感情的であり、バランスに欠けていたと記憶するが、アンナ自身は事件について特別な感情は特に抱いていない。

筆者：「たくさんの方が逮捕されたんですね」

アンナ：「そう、そうですね。でも…ええ、それは大きな出来事だったけれど、私はもっと悪くなっていたんじゃないかと思います。長引く可能性がありましたが、

かなり早く収束しました。」

アンナは、自分のような若い世代では統合は既に実現していると答えたうえで、次のように話す。

アンナ：「実際、統合の問題はあります。私は良い例でも悪い例でもないけど、私はエストニア学校に行ったので、エストニア人の友達があります。エストニア文化や全てのことと強く繋がっているということは、私は統合されているということです。でも私の知り合いのロシア語話者の女性は、彼女はエストニア系が少ないイタ・ヴィル県の町の出身で、エストニア語の大学に進学するためにタリンに来たけれど、エストニア人の友達やエストニア人の繋がり、個人的なレベルでできませんでした。だから彼女の仕事はロシア語話者との仕事だし、家族も友達もほとんどがロシア語話者だと私は知っています。だから彼女が統合されているかどうかを言うのは難しい。彼女のエストニア語はとても上手です。でも彼女はエストニア人のことについてはあまり知らない…。」

アンナの両親も地元のメディアを視聴せず、地元のコンサートにも行かず、何がエストニアで起こっているかを知らないという。エストニア人とロシア語系住民が社会的に違う場所で過ごし、人々が住む場所も分離してきているとアンナは話す。

(4)小括

本章では、パスポートの選択、エストニア語の習得と社会との関わり、「統合」に対する評価に焦点を当て、ロシア語系住民9名の語りに注目してきた。本項では第3章を小括し、次章の分析へと論を繋げることを目標とする。

無国籍者が外国人パスポートを保持する理由には、ロシアやシェンゲン協定加盟国にビザなしで渡航できるという利便性、男性の場合は兵役義務の回避、選挙への無関心、生まれ育った国で帰化申請をすることへの不公平感、帰化申請をする動機の乏しさなど、多数の要因が組み合わさっていることがわかる。ただニコライやオレグのように、一度帰化試験をパスしても外国人パスポートを保持し続ける理由は明確ではな

く、「何となく」というものである。第4章ではこの無国籍者たちの選択を、第1章で示した「非・明示」のアイデンティティの概念を用いて分析したい。

エストニアパスポートの保持者たちは、無国籍者同様、ソ連国内の大規模な移動を結果とする、多様なルーツからなる家系の出身者である。そのため、家族の中でパスポートの種類が違うことはそれほど珍しいことではないことがうかがえる。マリ、レフ、アンナ、イヴァンのように1940年以前にエストニアの領土内に住んでいたエストニア人の親類を持つ結果、自動付与の対象になった者もいるが、ニーナやユーリのように、ルーツはエストニアになくても、独立後すぐに親がエストニアパスポートを取得したために自動付与対象者になった者もいる。また、アンナとニーナが「エストニアパスポートを取得しやすい時期があった」と述べ、帰化申請により同パスポートを取得したヴィクトルが「試験には合格したいという意志だけが必要」と言っていることから、パスポートの取得自体はそれほど難しくないことがわかる。このような現状からも、エストニアパスポートを持っていることが、エストニアに対する帰属意識の強さを意味するかどうかという点は疑問の余地があり、第4章で考察を要するだろう。

次にエストニア語の習得状況は、エストニア社会との接触に大きな影響を与えていることがわかる。ロシア語学校に通っていた場合、およそ12年間エストニア語を学び続け優秀な成績を修めたとしても、卒業時に流暢に話せていたわけではない。ニコライ、オレグ、ヴィクトルのように、卒業後もエストニア語を話す機会がほとんど無く、エストニア社会との接点が少ない場合もあれば、マリやレフのように、学校や大学の内外でエストニア語を用い、エストニア社会へ積極的に関与していく中で語学が上達する場合もある。また男性のインタビュー協力者からは、兵役がエストニア語の集中訓練に適しているという意見もある。さらに幼い頃からエストニア語を学び、ネイティブもしくはそれと同等のレベルがあるアンナやユーリの場合は、エストニア人の友人と付き合いもあり、エストニア社会との接点が多く、エストニア社会そのものが中心的な居場所になっている。しかしイヴァンやニーナのように会話が上達しても、エストニア人との摩擦を感じ、エストニア社会との距離感が払拭されるわけではないこともある。エストニア語が流暢であることが、ロシア語系住民にとって「完全にエストニア人になること」なのかどうかについては、疑問が残る。

さらに、ロシア語系住民たちによるロシアとの接触の取り方も様々である。レフや

ヴィクトルは、政治的にロシアに対し好印象を抱いておらず、訪問することへの興味をほとんど持っていない。一方でイヴァンやニコライ、オレグのように、親戚や友人に会いに行く場合や、あるいはユーリのように自らのエスニシティに関わる国として、またはマリのように政治的には評価せずとも、文化的魅力を持つ国としてロシア訪問に関心を抱く者もいる。だがエストニア社会の一員であると自分を感じていても、あるいはエストニア社会との間に距離を感じていても、「エストニアが自分の帰ってくる場所である」という意識は皆に共通している。第4章では、語学習得や、複数の社会との接触を通して構築されていくアイデンティティの可塑性について、より詳細に議論を深めたい。

最後に、「銅の兵士」像移設事件に対する個人の関心の度合いにはばらつきがある。ニコライやヴィクトルは、戦争の悲劇や戦勝記念のシンボルとしての兵士像そのものに抱いていた思い入れを語るが、アンナやユーリ、レフなど20代の世代の関心は薄い。また残る人々は、移設を強行した政府のやり方について憤りを感じているが、兵士像自体は彼らにとってそれほど重要ではなかったことがわかる。ただ程度の差はあれ、エストニア人とロシア語系住民という二項対立が政府とメディアによって煽られ、そこに巻き込まれた、もしくは緊張感を感じていたという経験は共通している。アイデンティティの可塑性が脅かされる集団性の出現として、第4章ではこの経験を分析していく。

「統合」の評価については、EUからの補助金目当てで内容を伴わないとして政府を批判する意見や、「統合」はエストニア化という一方通行だという意見が多数を占める。一方エストニア語能力の高いアンナとユーリは、自らについて「統合されている」と話す。9名におおむね共通しているのは、ニーナやイヴァンなどが言うように、政府主導の「統合」は必要としておらず、身近な人々のレベルで「統合」は実現しつつあり、日常的な問題はないという意見である。イヴァンやニコライは、意外にも英語が若い世代の日常的な「統合」の手助けになっていることを語る。公的なレベルでの「統合」と、個人的なレベルでの「統合」がロシア語系住民の第二世代にどのように作用しているのかについても、次章で考察を加えたい。

第4章 分析

1. アイデンティティの可塑性―「非・明示」のアイデンティティ

インタビューの分析のために、本稿では「非・明示」のアイデンティティという分析概念を用いる。「非・明示」のアイデンティティとは、国籍の種類や使用言語などの客観的な指標とは必ずしも一致せず、統合されていないアイデンティティの状態であり、いわば自らのアイデンティティを何か特定のカテゴリに当てはめることを躊躇する状態である。

第3章のインタビューでは、外国人パスポートを持つことの利点が無国籍者たちによって語られていた。外国人パスポートを持つことは、ロシアとEUのシェンゲン協定加盟国の双方に自由に行き来することができるという点で、エストニアや欧州諸国、そしてロシアとの双方の接触を保ちつつ、そのどちらにも帰属しない「宙ぶらりん」の状態を保つことができる。たとえエストニア政府から「外国人」として扱われ、完全な参政権を持たず、公務員の職に就けないとしても、それは無国籍者たちの日常的な生活に大きな支障をもたらすものではない。むしろエストニアの兵役が免除されていることは、国家の要請に応える必要がない身軽さであるともいえる。ニコライとオレグが一度帰化試験に合格したにも関わらず、エストニアパスポートを選択しなかった理由は明確ではない。だがエストニア社会との距離を感じ、ロシア語系住民社会に身を置いてロシアとの接触を保ちながらも、エストニアを故郷だと認識するこの二人にとって、「非・明示」のアイデンティティの状態を保つことができる外国人パスポートは、維持される必要があったと考えられる。

一方で、外国人パスポートが持つ利便性に魅力を感じなくなったときや、エストニア人と同等の権利やより広範な移動の自由を欲するようになったとき、無国籍者は帰化申請によって「エストニア人」になる。帰化にあたってのエストニア語能力試験はそれほど難しくない以上、エストニアパスポートを得ることは比較的容易である。

しかし彼らは書類の上で「エストニア人」であるとしても、エストニア語を十分に話せなければエストニア人として認められることはない。たとえばエストニアパスポートを取得したヴィクトルは、ロシア語アクセントのない、「純粋な」エストニア語を要求されている感覚を持っている。ロシア語で教育を受けた彼が、むしろ全ての授業

のエストニア語化を求め、「全ての子供たちがエストニア人と同等の権利や可能性を持てるようにするべきだ」という意見を述べることは、彼自身がそのような権利や可能性を十分に感じていないことを意味する。

また、エストニア語習得における苦労や疎外感、外国人パスポート保持者や帰化によるパスポート取得者だけが持つものではなく、程度の差はあれ自動付与対象者にも共通する。ソ連時代の大規模な国内移動の果てに、多様なルーツからなる家系に生まれたことは、無国籍者でもエストニア国籍取得者でも、また自動付与対象者であってもそう変わらない。かえってマリのように、エストニア人の名前を持ち、エストニア人の「血」を引くにも関わらずロシア語母語話者であるという葛藤が、「自分は何者なのか」という問いを深めることもある。

もはやどのパスポートを持っているかということは、彼らのアイデンティティを「明示」するものにはなりえず、いずれのパスポートの保持者にとっても、「非・明示」のアイデンティティの状態は維持される。つまり、エストニアパスポートを取得・保持しているからと言って、ロシア語系住民はエストニア人と完全に同一化するわけではない。また持っていないからと言って、彼らがエストニアに何の帰属意識も感じていないわけでもない。

それでは彼らのアイデンティティの構築に対してより強い影響を及ぼすものは、やはりエストニア語の習得なのだろうか。つまり、エストニア語の能力こそが彼らのアイデンティティを「明示」するものなのか。唯一エストニア語学校に通い二つの母語を持つアンナには、エストニア社会が常に身近であった。一方、ラスナマエ出身でロシア語学校に通い、その後も基本的にロシア語のみを使う生活を送ったヴィクトル、オレグ、ニコライはエストニア語を練習する機会がなく、現在に至るまでエストニア社会との接点は限られていた。また、ニーナ、イヴァン、マリ、レフ、ユーリたちも、現在はエストニア社会との接点を持っているが、高校卒業時までは主にロシア語系住民社会の中で生きていた。このように、どの言語を話すかということはロシア語系住民が所属する社会を決定し、彼らのアイデンティティを「明示」しているかのように見える。

だが言語の能力は変化するものであり、ここにアイデンティティの可塑性が認められる。イヴァンは兵役の中でエストニア語を集中的に訓練し、間違いを恐れず積極的に使う方向へと意識を変えた。マリは大学の授業でエストニア語の語彙を徐々に増や

し、修士論文で自らの経験を振り返って発表することにより、「癒し」ともいえる感覚を得た。レフも大学の内外でエストニア語を習得し、NGO 活動の中でエストニア人との交流の機会を増やしていった。エストニア語を話すとき少し恐怖心を覚えるというヴィクトルもまた、職場でのエストニア人とのやり取りの中で少しずつエストニア語の練習を試みている。ユーリはもともと言語集中訓練プログラムによって高いエストニア語能力を持っていたが、進学と共にエストニア語の環境に身を置き、多くのエストニア人の友人たちに恵まれた。

エストニア語を学び、それをを用いることにより、ロシア語系住民社会だけではない場所での経験が彼らの中で蓄積される。したがってエストニア語を習得することは、エストニア社会に「接近」することにはなる。そしてロシア語学校に通ったロシア語母語話者の場合、エストニア社会へ「接近」するためには、ヴィクトルが言うように「かなり強い人になる」必要がある。意識的であれ無意識的であれ、失敗を恐れず、交友関係を広げ、積極的にエストニア語の環境の中へ入っていく必要があるのである。

しかしそれは「接近」であり、完全な「一致」を必ずしも意味するものではない。また「一致」をロシア語系住民自身が求めているわけでもない。確かにアンナのようにエストニア語も母語とする場合は、エストニア社会により強く取り込まれている。だがエストニア語を習得したイヴァン、ユーリ、ニーナの例は、エストニア語の習得が、エストニア人との同一化を必ずしも意味するものではないことを示している。

イヴァンは兵役訓練で落ちこぼれないようにエストニア語を鍛え、より多くの可能性を得るため、エストニア社会へと積極的に「接近」しようとしてきた。だがイヴァンはエストニア語の重要性を肯定しながらも、日々の中でエストニア人とのわずかな摩擦を感じ取っている。白か黒かでロシア語話者を判断するような国民＝国家の在り方にイヴァンは反発する。ユーリは「エストニアを愛している」と言い、エストニア社会に限りなく「接近」しながらも、それと同時に、「ロシア人 (Russian) としての立場も保ちたい」と話し、自らのルーツがあるロシアの大都市モスクワに憧れて留学を経験している。またニーナは職場の同僚のエストニア人たちと友好的な関係を持つが、夫のオレグ同様にエストニア人の友人はおらず、相手がロシア語を話せると分かれば積極的にロシア語を用いるという。彼女はオレグと共にロシア語の無料雑誌を発行し続け、ロシア語系住民のコミュニティを重視しているように見える。

ロシア語系住民にとって、エストニア語の習得がアイデンティティの構築に大きな

影響を与えることは明らかである。しかしエストニア語を十分に話せるからと言って、それはエストニア人と同一化することではない。またエストニア語を話せないからと言って、それはエストニアを故郷と感じていないということでもない。オレグやニコライのように、エストニア語の能力が十分ではなくても、またはロシアで居心地の良さを感じるとしても、彼らにとっての「ホーム」はエストニアなのである。したがって、エストニア語能力もまた、彼らのアイデンティティを「明示」するものにはならない。エストニア語を習得したり使用したりする過程においても、「非・明示」のアイデンティティの構築は維持されている。

ロシア語系住民の「第二世代」は、エストニア社会、ロシア語系住民社会、あるいはロシアや他の諸外国など、複数の社会における実践を通じ、その時々で様々な居場所を見出している。当たり前のことではあるが、ロシア語系住民たちは複数の社会のそれぞれに、好ましい部分と好ましくない部分をその都度感じ取っている。そうであるならば、国籍や言語といった要素によって、ロシア語系住民のアイデンティティを「エストニア人」あるいは「ロシア人」という何か一つの固定的なカテゴリに回収し、「明示」することは不可能である。

オレグは年配のロシア語系住民たちと自分たちの世代を比較したとき、彼はロシアとの繋がりを感じつつも、「自分のやり方」を持っており、ソ連出身のロシア人とは違うのだと述べていた。本項から導かれる第二世代による「自分のやり方」とは、「非・明示」的なアイデンティティの構築であり、その構築とは、個々人の日常的な実践の中でその都度かたちを変えていく、可塑性を持ったプロセスである。

2. 可塑性が脅かされるとき—集団性の出現

国民＝国家が「真実にはたった一つの民族しか代表しえない」という観念は、実際には全ての国民＝国家が歴史的に多くのアイデンティティの融合を内包しているという現実と矛盾する〔アパデュライ 2000:277〕。だが国民＝国家は自らの存在を継続させるために、言語政策や国籍付与といった実践を重ね、国家が代表する「たった一つの民族」を生み出そうとする。

国民＝国家によるこうした集団的アイデンティティの動員は絶えず行われていることだが、通常、人々はその動員の中でも「非・明示」のアイデンティティを保持し続けている。エストニアにおいて動員の中心となるのは、エストニア国籍の付与とエ

ストニア語を核とする言語政策であるが、前項で示した通りロシア語系住民たちは、国籍や言語といった要素には完全に規定されない、「非・明示」のアイデンティティを構築している。

だがエスニシティの政治が強力に働くとき、「非・明示」のアイデンティティは脅かされ、人々は「明示」された集団的アイデンティティ、すなわち彼ら／私たちという二項対立の中へ巻き込まれるか、そのカテゴリへ自らを投じざるをえなくなってしまう。2007年の「銅の兵士」像移設事件は、ロシア語系住民の「統合」が停滞した出来事として彼らに記憶されている。移設事件への関心は個人差があるが、実際にインタビュー協力者の多くに共通していたのは、「政府とメディアが人々を『エストニア人』と『ロシア人』に分断し、緊張が生じた」という意見であった。

マリが言うように、兵士像はそもそも第二次世界大戦で命を落としたソ連兵を追悼するためのものであったが、エストニア独立後、エストニア人側にとってはソ連による侵略という負の記憶を、ロシア語系住民側にとっては祖国の戦勝を記念する正の記憶を、それぞれ象徴するシンボルとして機能するようになった。国家は二項対立的なシンボルに介入することによって、エスニシティの政治を最大限に機能させたと考えられる。

ニコライとヴィクトルにとって、兵士像は特別な意味を持っていた。ニコライは第二次世界大戦中に起きた祖母の悲劇的な経験を述べ、兵士像は「私たち＝ロシア語系住民」にとって重要なものであったと語った。また、当時親ロシア的な考えを持っていたヴィクトルは、戦勝した祖国の強さを兵士像に重ね合わせ、それを自分の大きなロシア文化の一部だと認識していた。それらは彼ら自身が経験した記憶ではなく、ロシア語系住民の一員として、過去から連なる物語の中に自らを位置付けるような集合的記憶である。集合的記憶を留めておく役割を果たしていたシンボルに国家が介入したことは、自らのアイデンティティの拠り所の一つが揺るがされる経験であったのではないだろうか。彼らはそのようなアイデンティティの危機に対抗するための手段として、「私たち＝ロシア語系住民」／「彼ら＝エストニア人」というカテゴリに身を投じざるを得なかったと考えられる。

他のインタビュー協力者たちにとって兵士像そのものの重要性は高くなかったが、彼らもまた、政府が何の敬意も十分な説明もなく移設を強行したやり方には不満や疑問を持っていた。ニーナとマリの例は、兵士像に特別な思い入れがなかったロシア語

系住民たちもまた、「ロシア人」という均質的なカテゴリの中に突然振り分けられたことを示している。

ニーナは、事件後にエストニア人の同僚との間で起こった摩擦、ロシア語を話すことに緊張感を抱いた経験を語り、「ロシア人は皆ひどい」と同僚から一般化されたことに反発する。マリもまた、エストニアとロシアの対立を煽るメディアを目の当たりにし、母語がロシア語であるというだけで、反エストニア的なロシア側の人間であるという檻に入れられたような感覚を覚えたという。このような彼女たちの経験は、個としてのアイデンティティが無視され、エストニア側からは「反エストニア的なロシア人」と、ロシア側からは「ファシストであるエストニアを倒すために立ち上がったロシア人」というように、集団的カテゴリのレッテルを貼られた経験であるといえる。

国家によるエスニシティの政治と、個人レベルでのアイデンティティの構築は常に併存するものである。「明示」された集団的アイデンティティと、「非・明示」のアイデンティティの力は常に拮抗しており、前者は後者を一般化し、後者は前者から逸脱しようとする。だがエスニシティの政治が集合的記憶の対立するシンボルに介入するとき、「非・明示」のアイデンティティは「明示」されたアイデンティティによってラベリングされ、その可塑性は無視されてしまう。

3. 公的な「統合」への疑問符

政府による公的な「統合」に対するイメージは、9名の多くによって、「エストニア化という一方通行」として語られる。さらにレフやニコライ、ヴィクトルは、「統合」はEUからの予算を確保する手段に過ぎず、実体を伴わない形式的な概念であるという意見を述べていた。ユーリとアンナは自らが「統合」された人間であるという自覚を持っているが、ユーリにとって「統合」は「興味のないエストニア語の詩を聴くこと」という味気のないイメージである。9名の語りから浮かび上がるのは、政府やEUなど上からの「統合」は必要ではなく、「統合」そのものを目的としない、エストニア人とロシア語系住民の関わり方の重要性である。レフが環境学に関するNGO活動を行ったり、イヴァンがスケッチのイベントを開催したりすることは、あくまでも環境学やスケッチが活動の目的であり、「統合」を目的としていない。だがそこに、エストニア人とロシア語系住民の関わりが副産物として生じている。またエストニア語を中心とした「統合」を目指す政府にとっては皮肉であるが、イヴァンやニコライが指摘

するように、英語によるコミュニケーションが、どの言語の話者も排除しない方法として機能するという現実がある。

ニーナが言うように「皆が統合にうんざりしている」にも関わらず、「統合」が政府やメディアによって語られ続けることは、「お前は誰だ」という問いかけが、ロシア語系住民たちに向けられ続けるということでもある。ニーナは、筆者が彼女と出会うきっかけにもなった、2016年11月にモスクワで行われた「エストニアの現代ロシア文化フェスティバル」を開催した際、フェスティバルのパンフレットの中でこう書いている（以下カッコ内筆者補足）。

「ロシア語系エストニア人（Russian-language Estonians）である私たちがロシアを訪れるとき、私たちはよく、「あなたのロシア語はとても上手ですね」と言われます。（中略）一方で、エストニアでは皆が、エストニア国家とエストニア文化が考慮された限りの、私たちの自己アイデンティフィケーションに興味を持っています。結果的に私たちは様々なラベルを避けるために、異なる文脈において自分たち自身を何度も何度も定義しなければなりません。時にこのプロセスは、痛みと苛立ちを伴うものです [Triumph Gallery 2016:8]。」

ニーナはこの中で、アイデンティティを問われているということに対してきわめて自覚的である。それではなぜ、何のために、ロシア語系住民のアイデンティティは問われ続けるのだろうか。アパデュライによれば、「少数派民族は、彼らにおびえる多数派民族と同じく、人工的」であり、「ある集団を少数派民族として政治的かつ行政的に指定することが、寿命は短くとも歴史は長いラベルのもとに多数派民族を結集させることに貢献している」[アパデュライ 2004:290] という。つまり国家は、ある集団を少数派民族として保護の対象とすることで、多数派民族の「真正さ」を確かめようとする。

エストニアにおいてもまた、国家は「統合」を語り続けることによって、「統合」の対象であるロシア語系住民が「私たち＝エストニア人」ではないことを確認し続けている。言い換えれば、ロシア語系住民の「統合」を唱え、「統合」を測る指標として彼らのアイデンティティを表象し分類することは、「真正なエストニア人らしさ」を追求する行為である。つまり、「エストニア語が流暢であること」、「エストニア国籍を持つ

こと」、「国家に対して忠誠的であること」といった指標が「統合」の度合いを示している以上、ニーナが言うように、人々が関心を抱くロシア語系住民のアイデンティティとは、「エストニア国家とエストニア文化が考慮された限りの」ものである。そしてその分類の過程において、個々のアイデンティティの可塑性は無視される。なぜなら「非・明示」のアイデンティティは、基幹民族の「真正さ」を前提とする国民＝国家には表象しえない、扱いが厄介なものであるからである。

第5章 結論

本稿ではエストニアにおけるロシア語系住民「第二世代」のアイデンティティ構築について、個々のアイデンティティの可塑性と、可塑性が脅かされる事態、その双方を検討してきた。本章では、自らを特定のカテゴリに当てはめることを躊躇う「非・明示」的なアイデンティティの構築と、その「非・明示」のアイデンティティを脅かす集団的アイデンティティの動員の全容を整理する。そしてエストニア政府が目指すロシア語系住民に対する「統合」政策が、ロシア語系住民のアイデンティティとどのような関わりにあるのかを明らかにする。最後に、「ロシア語系エストニア人とは誰か」という本稿の題である問いに対する結論を述べ、本研究の課題点を挙げる。

本稿で第一に明らかになったのは、パスポートの種類やエストニア語能力といった要素によって、ロシア語系住民のアイデンティティを「エストニア人」あるいは「ロシア人」という何か一つの固定的なカテゴリに回収し、「明示」することはできないということであった。エストニアパスポートを持っていることはエストニア人と必ずしも同一化することではなく、また外国人パスポートを持っているからといって、それはエストニアに帰属意識を感じていないということではない。また、彼らはエストニア語の習得によって限りなくエストニア社会に「接近」しながらも、完全にエストニア人と同一化することではなく、完璧なロシア語を話しロシアで居心地良く感じるとしても、ロシア人と完全に同一化することはない。しかしだからといって、彼らのアイデンティティを単に「エストニア人とロシア人の中間」として片付けるのは不適當である。なぜならロシア語系住民の第二世代は、エストニア社会、ロシア語系住民社会、ロシアや諸外国の社会の間を行き来する実践を積み重ね、その時々によって可変的なアイデンティティを構築していくためである。彼らが維持しているのは、国籍や言語といった要素に完全に規定されず、「エストニア人」や「ロシア人」といった特定のカテゴリに自らを当てはめることを躊躇うような、可塑性を持つ「非・明示」のアイデンティティである。

第二に明らかになったのは、「非・明示」的なアイデンティティの構築が、国家による集団的アイデンティティの動員、つまりエスニシティの政治の影響下に常に晒されているということである。日常生活ではエスニシティの政治は失敗し、個人は統合に

欠けたアイデンティティ、すなわち「エストニア人」や「ロシア人」といった特定のカテゴリの一員であると示す必要のない、「非・明示」のアイデンティティでも問題なく暮らしている。だが「銅の兵士」像のように、集合的記憶に関するシンボルに国家が介入したとき、「エストニア人」／「ロシア人」という二項対立の集団的カテゴリが刺激され、エスニシティの政治は最大限に機能する。「非・明示」のアイデンティティの状態は脅かされ、ロシア語系住民たちは「ロシア人」という「明示」された集団的カテゴリの中に押し込められるか、もしくは集合的記憶によって支えられていたアイデンティティの危機に対抗するために、集団的カテゴリの中へ自ら身を投じざるを得なくなってしまう。

だが「非・明示」のアイデンティティの構築も、あるいはそれを脅かす集団的アイデンティティの出現も、ロシア語系住民が「果てしない自己への問いかけ」[岸 2013:401]の状態にあるという意味で、大きな違いはないのかもしれない。最後に筆者が問いたいののは、「果てしない自己への問いかけ」という状態、つまり「お前は誰だ」という問いを向け続けられる状態を生み出す大きな要因の一つとなっているのが、国家が主導する「統合」政策ではないだろうかということである。ここでは改めて、エストニアの歴史背景に注目する必要がある。

数百年の間にわたって大国の支配下にあり、1918年に一度は独立を果たすも1940年にソ連に侵略され、1991年にようやく独立を回復したエストニアにとって、国民＝国家の建設は早急な課題であった。相対的に小規模な政治体にとっては、近接する大規模な政治体による文化的併合への恐怖がたえず存在している[アパデュライ 2004:68]ためである。したがって、エストニアパスポートの発行、エストニア語を核とする言語政策、ソ連を想起させる銅像の中心部からの撤去は、いずれもソ連という過去やロシアという脅威と決別するためのプロセスであると考えられる。なかでもエストニア語は、長きにわたる大国からの支配の中でも生き残った言語として、「エストニア人らしさ」を証明する最も重要な要素であると言えるだろう。そしてエストニア国家にとって、ロシア語はロシア帝国やソ連の支配下で「押し付けられた」言語であり、ロシア語系住民はそのロシア語を母語としているために、ロシアやソ連と同一視される対象なのである。

エストニア国家が「統合」を目指せば目指すほど、ロシア語系住民は他者化され、「エストニア人らしさ」が強調される。国家がロシア語系住民にエストニアパスポート

トを持たせ、エストニア語を教育し、エストニアの一部なのだという帰属意識を持たせようとするほどに、ロシア語系住民たちはエストニア社会へ「接近」はしつつも、どこかで「自分はエストニア人と完全に同じではない」という思いに直面する。そしてその「統合」の追求の結果として明らかになっていくのは、エストニアパスポートを持ち、エストニア語を完璧に話す、国家に対して忠実な「真正なエストニア人」の輪郭である。

実際、ロシア語系住民が感じているエストニア社会との関わりは、「統合」を目的としない行為の中に生まれていることから、国家主導の「統合」政策は失敗している。岸が指摘するように、「あなたは仲間だ」という言葉は「お前は誰だ」という問いかけであり、意識的で意図的な同化は、同化という現象そのものの本質と矛盾しているため失敗に終わる運命にある〔岸 2013:416,418〕のである。そうであるならば、実はロシア語系住民の「統合」を誰よりも必要としているのは、「お前は誰だ」とロシア語系住民に問い、彼らを他者化することによって自らのアイデンティティを確かめたい、エストニア国家の側ではないだろうか。ロシア語系住民の「統合」とはエストニアにとって永遠にたどり着くことのできない地点であり、むしろ達成しえないからこそ、エストニアは国民＝国家としての状態を存続させることができるのである。そしてエストニア国家が、ロシア語系住民のアイデンティティを表象し分類することによって「統合」の度合いを測ろうとすると、個々のアイデンティティの可塑性は無視され、「非・明示」のアイデンティティは表象されえないものになっている。

ロシア語系エストニア人とは誰か。彼ら一人ひとりのアイデンティティに可塑性がある以上、「ロシア語系住民」もまた一つの表象に過ぎない。だが本稿で結論付けるならば、「第二世代」のロシア語系エストニア人とは、国家による集団的アイデンティティの動員と、可塑性を持つ「非・明示」のアイデンティティ構築の間に働く力関係の中で、エストニア社会、ロシア語系住民社会、ロシアあるいはその他の世界を行き来しながら、エストニアに暮らす人々である。

最後に本稿の課題を整理しておきたい。第一に、アイデンティティに関する理論は膨大かつ難解であり、本稿ではその全ての流れを追うことは十分にできていない。本稿では可塑性を持つ「非・明示」のアイデンティティとそれを脅かす集団性の出現という仮説を立てて分析を進めてきたが、この分析枠組みの適当性については、さらなる先行研究に照らし合わせた一層の検討を要するだろう。第二に、インタビューの手

法に関しては、第3章で示したように使用言語や統制の問題などが残っており、改善の余地が大いにある。またインタビューできた時間や量の個人差が大きい点も課題の一つである。第三に、ロシア語系住民の10代から20代前半の若者のアイデンティティ構築については、本稿で調査を行うことはできなかった。彼らは本稿に登場するロシア語系住民よりもさらにエストニア語が流暢であることが考えられることから、新たな研究が必要だろう。以上のことから、アイデンティティ理論に関する理解を深めつつ、語学や質的調査の知識を鍛え、対象についてより厚く記述することを今後の目標としたい。

注

- (1)白地図作成サイト Craft Map (<http://www.craftmap.box-i.net/>) より (2018/1/14 参照)。
- (2)エストニア統計局のサイト (https://www.stat.ee/sdb-update?db_update_id=13544) より (2018/1/14 参照)。
- (3)エストニア文化庁のサイト (https://www.kul.rik.ee/sites/kulminn/files/2_riigiidentiteet_eng.pdf) より (2018/1/14 参照)。
- (4)エストニア統計局のサイト (<https://www.stat.ee/stat-population-at-beginning-of-year>) より (2018/1/14 参照)。
- (5)ペレストロイカ（建て直し）とグラスノスチ（公開）とは、経済の停滞や消費物資の欠乏を脱すべく、ソ連経済の効率化をはかるためにゴルバチョフ書記長が 1986 年に始めた改革を指す。特にグラスノスチの影響として、バルト三国ではスターリンによる大量強制連行の犠牲者の追悼が開かれたり、環境問題をめぐる抗議運動が組織されたりした。また国外旅行の制限が緩和され、エストニアにはソ連初の外国企業との合弁企業のうちの数社ができた。共産党に対する批判が徐々に強まり、1988 年にはエストニアで「ペレストロイカを支持するエストニア人民戦線」が結成、以後の独立運動において主導的な役割を果たした [カセカンブ 2014:263-266]。
- (6)マイクロソフト社のサイト (<https://www.microsoft.com/en-us/stories/skype/skype-chapter-2-welcome-to-estonia.aspx>) より (2018/1/14 参照)。
- (7)ロシア正教の一派。17 世紀中葉にロシア正教会で実施された典礼改革を拒んだため、ロシア帝国時代に政府や主流派教会（ニコン派）から迫害を受けてきた [伊賀上 2008:111]。エストニアには 17 世紀後半から流入し、主にペイプシ湖の西岸に定住し始めた [Plaat 2005:7]。2011 年の統計ではエストニア国内に 2,605 人の信者がいる。エストニア国内の古儀式派の信者数についてはエストニア統計局のサイト (<http://pub.stat.ee/px-web.2001/Dialog/varval.asp?ma=PC0454&lang=1>) より (2018/1/14 参照)。
- (8)タリン市 HP の Year Book of Tallinn (<http://www.tallinn.ee/est/g2677s56143>) より (2018/1/14 参照)。

(9)エストニア統計局のサイト

(http://pub.stat.ee/px-web.2001/I_Databas/Population_Census/databasetree.asp) より (2018/1/14 参照)。なお 2017 年現在、イタ・ヴィル県の人口は 14 万 3,880 人に減少している。

(10)「ストップ・ラスナマエ」の歌詞は以下の通り。

「見て、皆外国人、これが我が家？風が吹く道の真ん中を漂っているのは目的のない移民たち。見て、彼の目の中は空っぽで、彼女は何も感じていないか見えていない。今、力を合わせて、谷を全てこき下ろそう (Let's cry all now down the valley)。ストップ・ラスナマエ！」[Saar 2015:87]

この「谷」がラスナマエを指しているのかどうかは不明である。

(11)1993 年 7 月に行われた外国人法の再審議では、非市民に対し 5 年ごとの居住許可更新を要求する要件は取り下げられた [河原 2005:641]。

(12)エストニア統計局のサイト

(<http://pub.stat.ee/px-web.2001/Dialog/varval.asp?ma=PCE05&lang=1>) より (2018/1/14 参照)。

(13)エストニア国境警備局のサイトより (2018/1/14 参照)。

<https://www.politsei.ee/en/nouanded/dokumentide-naidised/estonian-citizens-passport/eesti-kodaniku-pass-2007-2014.dot> (画像左)

<https://www.politsei.ee/en/nouanded/dokumentide-naidised/aliens-passport/valismaalase-pass-2007-2014.dot> (画像右)

なお、これらの表紙デザインは、エストニアパスポートは 2007 年 5 月 22 日から 2014 年 5 月 31 日まで、外国人パスポートは 2007 年 5 月 22 日から 2014 年 2 月 29 日まで発行されていたデザインである。

(14)エストニアでは体力的・精神的に健康な全ての男性に対し、8 か月もしくは 11 か月の兵役義務を課されている。2013 年 4 月の法改正により、女性も兵役に参加することが可能になった。エストニア国防軍のサイト (<http://www.mil.ee/en/defence-forces/compulsory-military-service>) より (2018/1/14 参照)。

(15)エストニア文化庁のサイト

(http://www.kul.ee/sites/kulminn/files/sip_summary_2000-2007.pdf) より (2018/1/14 参照)。

(16)エストニア文化庁のサイト

(http://www.kul.ee/sites/kulminn/files/integrating_estonia_2020.pdf) より (2018/1/14 参照)。

(17)「銅の兵士」像は、第二次世界大戦の戦死者を哀悼し、ナチスドイツへの戦勝を記念して 1947 年に建てられた銅像である。軍服を着て脱帽したソ連兵が、陰しい表情でうつむいている。タリンの中心部にあったが、2007 年 4 月末には郊外の墓地に移設された。

(18)エストニア国営放送 ERR のニュースサイト

(<http://news.err.ee/116841/estonia-launches-its-first-russian-language-tv-channel>) より (2018/1/14 参照)。

(19)エストニア国営放送 ERR のニュースサイト

(<http://rus.err.ee/233008/v-ijule-samym-populjarnym-telekanalom-byi-kanal2-rejting-etv-stremitelno-upal>) より (2018/1/14 参照)。

参考文献

【理論】

アパデュライ、A

- 2004 『さまよえる近代：グローバル化の文化研究』 門田健一訳、平凡社。(Arjun Apadurai, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Mineapolis: University of Minnesota Press.)

上野千鶴子

- 2005 「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』pp.1-41、勁草書房。

岸政彦

- 2013 『同化と他者化 戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版。

バトラー、J

- 1999 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社。(Judith Butler, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. Routledge, Chapman &Hall, Inc.)

ブルーベイカー、R

- 2009 「『ディアスポラ』のディアスポラ」赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む：離散を架橋するために』pp.375-400、明石書店。(Rogers Brubaker, 2005, The 'diaspora' diaspora. *Ethnic and Racial Studies*, 01/2005, 28(1), 1-19)

Brubaker, R

- 2002 Ethnicity without groups. *European Journal of Sociology/Archives Europeennes de Sociologie*, 08/2002,43(2), 163-189.

ホール、S

- 2001 「誰がアイデンティティを必要とするのか？」ホール、ドゥ・ゲイ編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題：誰がアイデンティティを必要とするのか？』pp.1-35、宇波彰訳、大村書店。(Stuart Hall, 1996, Who needs identity? In S. Hall and P. Du-Gay (eds.) *Questions of Cultural Identity*, Sage.)

【地域研究】

伊賀上菜穂

- 2008 「『旧』古儀式派農村はソ連時代にどう語られたか」『スラブ・ユーラシア研究報告集』(1)(2008年12月):111-129。

小田桐奈美

- 2011 「民族間交流語・公用語から外国語へ?—キルギス共和国の言語教育におけるロシア語のゆくえ」『ロシア語学と言語教育』(3)(2011年3月):65-71。

カセカンブ、A

- 2014 『バルト三国の歴史:エストニア、ラトヴィア、リトアニア 石器時代から現代まで』小森宏美・重松尚訳、明石書店。(Andres Kasekamp, 2010, *A history of the Baltic States*, Palgrave.)

河原佑馬

- 2005 「エストニア共和国の市民権政策とロシア語系住民問題」
『岡山大学法学会雑誌』54(4)(2005年3月):627-664。

小森宏美

- 2005 「EUの中のロシア語系住民 —エストニア北東部ナルヴァ市の事例から—」
日本国際政治学会編『国際政治』142「新しいヨーロッパ拡大 EUの諸相」
(2005年8月):113-126。
2009 『エストニアの政治と歴史認識』三元社。

Aidarov, A and Drechsler, W

- 2013 Estonian Russification of Non-Russian Ethnic Minorities in Estonia? A Policy Analysis *TRAMES*, 17(67/62), 2, 103-128.

Jõessar, A

- 2015 One Country, Two Polarized Audiences: Estonia and the Deficiency of the Audiovisual Media Services Directive. *Media and Communication* 3(4), 45-51.

Kus, L, Liu, J, and Ward, C

- 2013 Relative deprivation versus system justification: Polemical social representations and identity positioning in a post-Soviet society. *European Journal of Social Psychology*, 08/2013, 43(5), 423-437.

Küün, E

- 2008 The ethnic and linguistic identity of Russian-speaking young people in Estonia.
TRAMES, 12(62/57), (2), 183-203.

Nimmerfeldt, G

- 2009 Identificational Integration of Second Generation Russians in Estonia.
Studies of Transition States and Societies, 1(1), 25-35.

Plaat, J

- 2005 The Identity and Demographic Situation of Russian Old Believers in Estonia (With
Regard to the Period of the 18th to the Early 21st Century).
Pro Ethnologia, 01/2005, 19, 7-31.

Saar, M

- 2015 Interpreting Sites of Historical Rupture in Post-Soviet Urban Space: The case of
Tallinn, Estonia. In H.Sooväli, H.Reinert, and J.Miles-Watson (eds.), *Ruptured
Landscapes: Landscape, Identity and Social Change*, pp.79-96, Springer.

Soll.M , Salvet.S and Masso.A

- 2015 Changes in Language Policy in Estonia: Self-Description of Russian Speaking
Students. *TRAMES*, 19(69/94), (3), 221-247.

Sokolova, N

- 2011 The Russian Second Generation in Tallinn and Kohtra-Järve: The TIES Study in
Estonia, chapter 2: Migration patterns
IMISCOE Reports, Amsterdam University Press R.Vetik and J.Helemäe (eds.)

Triumph Gallery

- 2016 *Extention.EE. Reflection: Inward/Outward Glance. Vol. III*

Zabrodskaja, A

- 2015 "What is my country to me?" Identity Construction by Russian-Speakers in the
Baltic Countries. *Sociolinguistic Studies*, 9, (2-3), 217-241.

Summary

Who are Russian-Speaking Estonians?

-Practices by the “Second” Generation and the Plasticity of their Identities-

After the independence from the Soviet Union in 1991, the Republic of Estonia started building nation-state, in which the Estonian citizenship and Estonian language played a leading part. At the same time, how to deal with Russian-speakers, who consisted of nearly 40% of the population in the country in 1989, became a main problem for the Estonian government.

The main aim of this paper is to make it clear the process of identity construction by the “second” generation of Russian-speakers in Estonia. While the “first” generation Russian-speakers lived mainly in Russian language environment and experienced the loss of home country, Soviet Union, the “second” generation grew up and learned Estonian language in independent Estonia. In order to measure the degree of “integration” to Estonian society, the Estonian government and many researchers are interested in identities of Russian-speakers, but these kinds of research focus on only classifying Russian-speakers as the representatives of any ethnic groups, such as “Estonian” or “Russian”. In these papers, such ethnic categories are considered as invariable, and the hybridity and the plasticity of identity are ignored.

In this paper, based on the face-to-face interviews with nine people from the second generation of Russian-speakers in Estonia, the author focuses on their individual practices, such as the choice of passports (citizenships), how to learn Estonian language, and connection with Russia and other EU countries. Moreover, the author is interested in that how the informants evaluate the official “integration” by the Estonian government.

As a result of that interview, the author finds that the second generation of Russian-speakers has the identities, which hesitate to apply the specific and fixed categories (for instance, “Estonians” or “Russians”) to themselves. The author named it “identity of non-clear indication”, which do not correspond with objective indicators, such as the types of passports and the usage of language. For example, people with alien passports (Non-Estonian citizens) choose the passport for their convenience, so even if they do not have Estonian passports and enough connections with Estonian people because of the lack of Estonian language skills, it

does not necessarily mean that they do not feel any affiliation to Estonia at all. In addition, even if Russian-speakers have the Estonian passports and enough Estonian language skills, it does not necessarily mean that they are completely the same with Estonians. This “identity of non-clear indication” is constructed through the practices in multiple societies (Estonian community, Russian-speaking community, and Russia or other countries).

However, the construction of this identity is always under the power of the politics of ethnicity. When the politics of ethnicity work strongly and try to evoke collective identities, each “identity of non-clear indication” is exposed to the threat of existence. For example, in 2007, the Estonian government relocated “the monument of a Bronze Soldier” from the city center of the capital to the suburb. For Estonians, The monument was the symbol of occupation by Soviet Unions, but for Russian-speakers, it was the symbol of victory over the Nazis-Germany. By the relocation of the monument, the tension between Estonians and Russian-speakers became high, and each Russian-speaker was suddenly put into the fixed collective category, “Russians”, or in order to counter with the crisis of identity, which was maintained by the monument, some Russian-speakers were inevitable to put themselves into the category. In these processes, it is quite difficult to keep the “identity of non-clear indication”.

Moreover, most informants feel that the official “integration” policy actually works only as “Estonianization”, and they think that real “integration” between Estonians and Russian-speakers is occurring through the interactions, in which “integration” itself is not set as the main goal. From this result, the author considers that the reason why Estonian state implements “integration” policy is that Estonian state wants to make it sure own identity by making Russian-speakers “others” to the state.

Who is the “second” generation of Russian-speaking Estonians? To this question, the author concludes that they are people, who live in a power relationship between the politics of ethnicity by the nation-state and the construction of the “identity of non-clear indication” by individuals.

謝辞

主査の関根久雄先生からはいくつもの貴重な助言を頂戴し、方向性の見えなかった私の問題意識を育てて頂いた。また、ゼミ生の仲間からは率直な意見や感想を多数もらい刺激を受けた。関根先生やゼミ生の仲間とのやり取りなしに、私は本稿を書くことはできなかった。

そして何より、インタビューに協力いただいた方々なしに本稿は成立しえなかった。ある日突然現れた見ず知らずの外国人の私に、多忙にも関わらずインタビューに応じ、根気よく質問に答えて頂いたことに最大限の感謝を申し上げたい。私が知り得たのは、協力者の人々の人生のほんの一部に過ぎない。だが彼らの話を聞かせてもらうことは、大きな歴史のうねりの中に入っていくような感覚があり、日本という国で育った自分を深く見つめ直す経験となった。

最後に、ロシアとエストニアで得た全ての出会い、そして学業生活を経済的に支援してくれた両親に感謝したい。